

皇學館大学
ボランティアルーム

令和元年度 活動報告書



目 次

担当教員挨拶	1
代表あいさつ	2
1. コーディネート状況報告	
・令和元年度ボランティアコーディネート 活動報告	5
2. ボランティアルーム企画・活動報告	
・HELLO ボランティア 活動報告	13
・くらたやま音楽祭 活動報告	16
・ちょこっと福祉体験 活動報告	19
・サマースクール 活動報告	23
・他大学視察 in 愛知淑徳大学 CCC 活動報告	28
・東大淀地区まちづくり協議会 5 周年企画 活動報告	32
・令和元年台風災害義援金募金 活動報告	36
・倉陵祭模擬店 活動報告	38
・倉陵祭展示 活動報告	42
・老人ホームで Let's 文化祭 活動報告	46
・伊勢市ボランティアセンターフェスティバル 活動報告	50
・「倉田山お掃除企画」 活動報告	53
・令和元年度ボランティアルーム年間報告会	56
・季刊誌 活動報告	62
3. アンケート報告	
・令和元年度アンケート報告	67
4. 資料	
・令和元年度年間スケジュール	79
・令和元年度ボランティア募集一覧	80
・令和元年度ボランティアルーム学生スタッフ一覧	81

令和元年のボランティアルームを振り返る

ボランティアルーム担当教員

教育学部 叶 俊文

令和元年のボランティアルームの活動を振り返ってみる。ボランティアルームの役割はボランティアを求める市民の方とボランティアをやってみたいと思っている学生をつなぐ役割になっている。この両者をコーディネートすることが一番の役割になる。

近年、言われ続けていることは、ボランティア依頼件数の減少とボランティア学生の減少である。市民の方からの依頼件数の減少は何を物語っているのか。これは皇學館大学ボランティアルームの信頼と関係する。皇學館大学ボランティアルームに依頼しても、ボランティアが来てくれないという認識を市民の方々が持つようになると、当然のことながら依頼は減少していく。依頼には締め切りがあり、その締め切りの時にボランティアに行く学生がいなければ、ボランティアルームのスタッフは電話で「昨日締め切りでしたが、ボランティアへの参加学生はいませんでした。申し訳ありません。」などに対応することになる。その時に学生スタッフは心が痛まないのだろうか。心から申し訳ないと思っているのだろうか。そこが大切な部分のように感じる。

ボランティア学生の減少は何を物語るのか。簡単に言ってしまうえば、ボランティアに興味を持つ学生が少なくなっているということになるだろう。ではどうするのか。学生スタッフはSNS世代ということもあり、InstagramやTwitterでのボランティア情報をどんどん流している。それまでのメール登録はどんどん減少し、より手ごろで、すぐに見ることができるツールに学生たちはシフトしている。すぐに見れるということは、すぐに見て流してしまうことも考えられる。そんな学生たちにどのような情報提供をすることがヒットにつながるのかを考えなければならぬ状況になっている。それともボランティアに興味のある学生に何度も行ってもらうことを良しとするのか。あるいは学生スタッフがどんどんボランティアに行くことで解決しようとするのか。考えどころになっている気がする。

この状況で増えているものがある。それは学生スタッフの数である。いつの間にか大人数になっている。大人数になっているのであれば、君らが「動きだせ！」ということになるだろう。ジッとしていても何も変わらないし、始まらない。数は力である。その数を活かして、どんどん動き出していけば、何か風景が見えるような気がする。動き出すことの大切さを4年生は教えていってくれたはずだ。大黒柱だった杉木さん、松下さんらが卒業するわけだが、彼女らが残したものはとても大きいような気がする。それを背負って動き出せ！！

皇學館大学ボランティアルームの第2ステージは始まっているのかと書いてきているが、チャンスが来ているように感じている。大人数で動き出して、いろんなことを考えれば、きっと次の景色が見えてくると思っている。それが様々な課題の解決にもつながっていくのではないだろうか。積極的にいこう。

「躍進」

皇學館大学ボランティアルーム 学生スタッフ
現代日本社会学部 現代日本社会学科
4年 杉木 真子

ボランティアルームが開設して7年が経ち、ボランティアルームの業務を行う中でどこに重点を置いていくのかという話になった。近年、学生スタッフは自らが企画するものに集中してしまい、ボランティアコーディネーターが疎かになっていた。そのため今年度は「信頼できるコーディネーターを」というスローガンを掲げた。このスローガンにした理由はもう一つある。それは一般学生への情報共有の面で必要なことだからである。例えば、ボランティアに参加したい学生がいたとする。その学生がボランティアに参加する際、集合場所や集合時間等がきちんと伝えられてなければ不安になり、信頼できないため次から参加しようとはならない。ボランティアルームを信頼し、不安感なく一般学生がボランティアに参加するためには学生スタッフの創意工夫が必要ということだ。そこで、学生スタッフが意識して情報共有を行うようこのスローガンを掲げた。

さらに、この1年は“歴史”を感じた年になったのではないかと感じた。皇學館大学社会福祉学部が名張学舎にあった際の学生支援センターと皇學館大学ボランティアルームの交流会を開催していただいた。そこでOBの先輩方のお話を聞き、自分たちが今行っていることは先輩方が作り上げてくださったものだと感じた。参加した学生の感想を「ココロの木」。同じ立場の学生の感想をボランティアに参加したことのない学生が読むことによって一歩が踏み出しやすくなるのではないかとはいじまった。学生スタッフの人数は増加しているが、ボランティア参加学生は減少している。このココロの木と共に近年、学生スタッフが友達をボランティアに呼び、参加学生を増加できるよう工夫している。やはり、ボランティアは参加した感想等を実際に聞くことで参加への一歩を踏み出そうと思う学生が多いようだ。ボランティア参加学生を増やすため、今後も呼びかけは継続してほしい。

そして、私は大学生活でボランティア活動に携わり、様々なことを得た。たくさんの人に会うことができたが、その中でもたくさんの壁に当たった。新しくSNSを導入し、現在の学生の生活スタイルに合わせ、ボランティアを募集していくことで学生にボランティアを身近に感じてもらえるよう働きかけた。しかし、ボランティア参加者は増加せず、これからもボランティアの魅力発信の仕方を考えていかなければいけない境遇にある。さらに、先ほど述べたようにボランティアの魅力を発信するためには、学生スタッフがボランティアの魅力に気づき発信していくことが今後必要となってくるだろう。

最後になりましたが、ボランティアの依頼や受け入れをしてくださったボランティア関係者の皆様に教職員とともに心より感謝申し上げます。どうか、今後とも変わらぬご支援・ご協力をよろしくお願いします。

1. コーディネート状況報告

令和元年度ボランティアコーディネート 活動報告

1. 目的

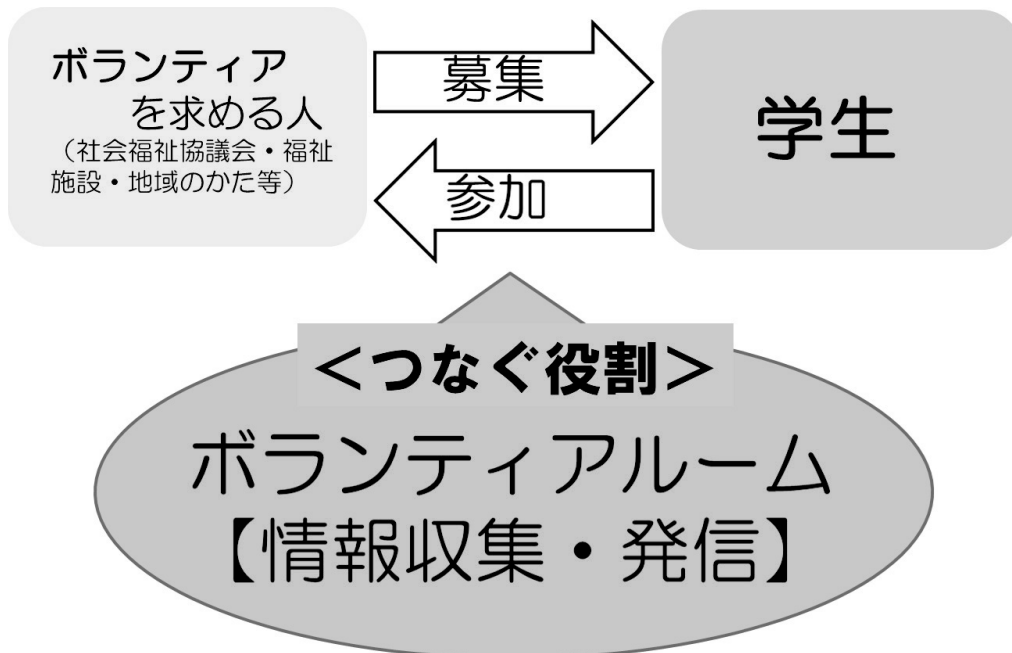
皇學館大学ボランティアルームでは、学生のボランティア活動の支援を学生スタッフが担っており、ボランティアコーディネートを第一に考えて活動を行っている。そこで、ボランティアコーディネートについて今年度の活動を報告する。

2. コーディネート活動内容

ボランティアコーディネーターとしての学生スタッフの活動は、地域から依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生を繋ぐことである。

学生へのボランティア情報提供の方法は、主に 2 号館 1 階ボランティアルーム横と 6 号館 1 階の掲示板への掲示、メール登録者へのメール配信である。しかし、近年メール登録者数が減少しており、登録していてもメールをなかなか見ないという学生の声を聞いたことから、今年度からメールに加え、さらに手軽にボランティア情報が手に入るようにと LINE でのボランティア情報配信を開始した。その他にも Twitter (ツイッター) や Instagram (インスタグラム) での企画ボランティアの発信や、平成 28 年度より行っている月別ボランティアを用いて情報発信をすることで学生の参加促進をねらっている。

ボランティアルームの仕組み



ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことにより、学生のボランティアの参加をより促すことができると考える。学生スタッフがボランティアコーディネートをを行うにあたってだが、気を付けなければならないこともある。それは、地域と学生の間を対等かつ互いが成長できる関係へと調整することである。円滑にコーディネートを行うために、学生スタッフ一人ひとりがボランティア先との連絡を取り合うことの責任や意識を持ち、取り組んでいく必要がある。

3. コーディネート状況

今年度地域から依頼されたボランティア情報件数は86件（随時ボランティア含む）であり、コーディネート件数は38件であった。コーディネート人数はのべ279人になる。コーディネート件数は昨年より12件増、コーディネート人数は昨年より154人増とコーディネート件数、コーディネート人数は昨年度よりも大幅に増加している。昨年度からコーディネート件数・コーディネート人数の減少が課題となっており、この結果は私達スタッフにとってもすごく嬉しい結果となった。しかし、皇學館大学には約3000人の学生が在籍しているので、約13人に1人という低い割合でのボランティア参加となっている。また、同じ学生が複数のボランティアに参加していることから参加の実人数はもっと少ないことになる。これらのことから、ボランティアに参加する学生は大学内でもまだ少ないと言える。内訳は以下の通りである。

ボランティア総件数	コーディネート件数	コーディネート人数
86件	38件	279人

ボランティアルームでは下記のように依頼されたボランティアを3つのジャンルに分けて情報を発信している。

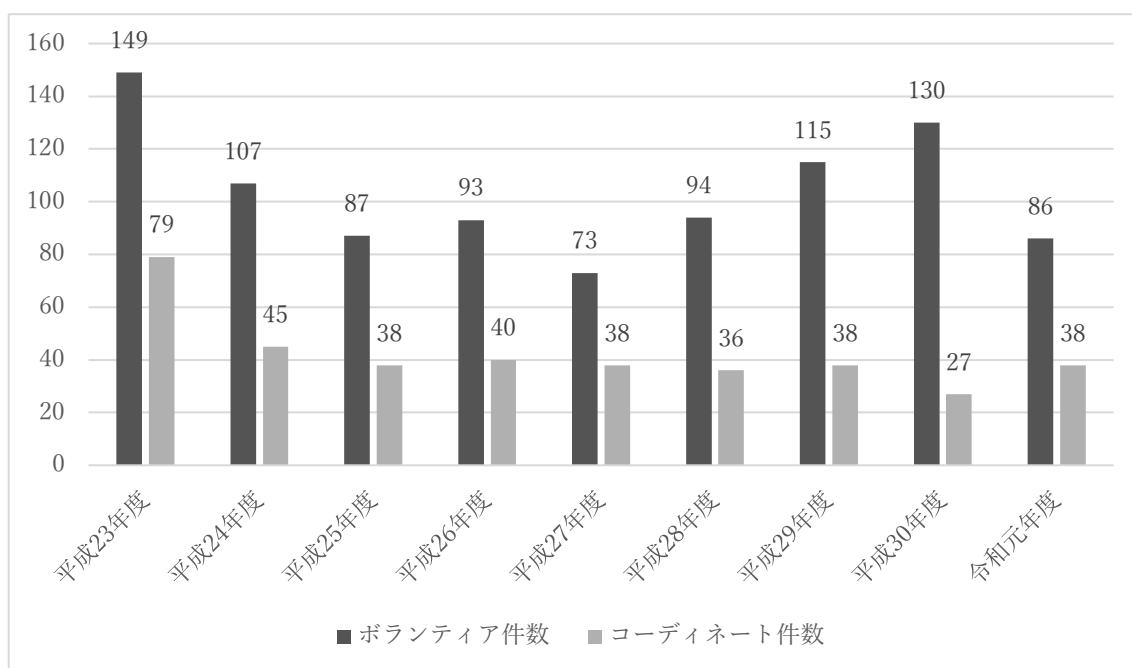
- ① 福祉系：高齢者施設、障がい者（児）、福祉競技スタッフなど
- ② 地域援助：地域イベント、災害地域支援活動、コンサートスタッフなど
- ③ 子どもサポート：託児補助、特別支援学級活動、子ども対象イベントスタッフなど

3つジャンルのボランティア情報件数は次の通りである。また一つの情報に複数のジャンルが重なることもある。

	ボランティア件数	コーディネート件数	参加人数
福祉	24件	8件	66名（昨年より27名増）
地域	31件	17件	91名（昨年より70名増）
子ども	31件	13件	122名（昨年より57名増）

今年度は、ボランティアの依頼が 86 件（昨年より 44 件減）と大幅に減少した。福祉系ボランティアは 24 件（昨年より 12 件減）、地域系ボランティアは 31 件（昨年より 6 件減）、子ども系ボランティアは 31 件（昨年より 3 件減）となっている。ボランティア件数こそは昨年度よりも減少しているが、コーディネート件数、参加人数は昨年よりも大幅に増加している。これは、昨年度まではメールのみのボランティア情報発信だったが、昨年度までのメール登録者減少という問題に加え、多くの学生からメール登録はしているものの、メールを日常生活で見ないという意見を聞いた。そのことから、今年度新たな取り組みとして、より手軽にボランティア情報を受け取れるようにと LINE での情報発信を行った。また、学生スタッフが友人や周りの学生と一緒に参加しようと積極的に呼びかけていた事が結果につながったのではないだろうか。この結果を踏まえ、今後も学生スタッフ一人ひとりがボランティアに参加し、その喜びを新たな学生に伝えボランティアの輪を広げていく必要がある。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると以下の通りである。



ボランティア依頼件数は、名張学舎から伊勢学舎に移転してきた平成 23 年度から減少してきたが、平成 28 年度から次第に上がってきた。しかし今年は 86 件と大幅に減少している。これは、近年課題としてあがっているコーディネート件数の減少が影響しているのではないかと考えている。社会福祉協議会や福祉施設などから依頼をいただいても、参加学生がいなければ参加者 0 人という連絡をしなければならない。コーディネート件数の減少により、参加者 0 人という連絡が増えていき、皇學館大学ボランティアルームに依頼しても参加者が集まらないというイメージがついてしまったのではないかとと思われる。ボランティア

ルームは依頼してくださる方がいるから成り立っている。依頼がなくなるということはボランティアルームの存続も危ぶまれる。依頼がきたボランティア全てに参加者を送ることは不可能かもしれないが、せめて依頼の半分はコーディネートできるようにしていかなければと思う。その中でも、平成 29 年度から継続して行っている月別ボランティアは今年度、新型コロナウイルスの影響により開催できなかった 2 月・3 月を除けば、すべての月別ボランティアに一般学生の参加を得ることができた。このことから、スタッフが一緒に参加する安心感が欲しい、一人で参加したくないという学生が多いという事がうかがえる。今まで月に一回だった月別ボランティアをスタッフの負担は増えるが、2 つ 3 つに増やしていく必要がある。

4. 学部学科別参加人数

学部別のボランティア参加人数は以下の通りである。

学部学科	参加人数 (昨年度人数)
文学部神道学科	9 人 (3 人)
文学部国文学科	16 人 (7 人)
文学部国史学科	31 人 (15 人)
文学部コミュニケーション学科	37 人 (16 人)
教育学部教育学科	89 人 (67 人)
現代日本社会学部現代日本社会学科	94 人 (81 人)

ボランティア参加人数を学部別で見ると、今年度は、全学科の参加学生が 2 倍近く増加した。この結果からやはり情報をより身近に手に入れられるようにという LINE の効果が出ているのではないかと思われる。昨年度までは、ボランティアに関して何か聞きたいことがあれば直接ルームに来ていただくことが多く、メールを使つての学生とのやり取りは見られなかった。しかし、今年度は LINE でのボランティアに関する問い合わせが多かったように思う。より気軽にボランティアのことが聞けるということは参加促進への大きな一歩に繋がっているのではないかと思う。しかし、やはり数字でみると教育学部や現代日本社会学部が全体の大半を占めており、文学部のボランティア参加が少ない。全体のボランティア募集の中でも子ども系と地域系の依頼が多いという傾向も関係している。スタッフの内訳も教育学部や現代日本社会学部の学生が多く、文学部のスタッフは少ない。教員になりたいから、地域の仕事がしたいからといった人達だけではなく、学部学科の垣根を越えてのアプローチをしていく必要があると考える。

5. ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみるコーディネートを分析する。今年度のメール登録数は29人、LINE登録数は184人、計213人である。登録学生の詳細は次の表に表わした。

メール登録学生詳細							
		1年	2年	3年	4年	博士課程	学科別合計
文学部	神道	4	1	0	0	0	5
	国文	3	5	0	0	1	9
	国史	1	2	1	0	0	4
	コミュニケーション	1	2	0	0	0	3
教育学部		0	6	0	0	0	6
現代日本社会学部		0	2	0	0	0	2
学年別合計		9	18	1	0	1	29

LINE登録学生詳細							
		1年	2年	3年	4年	博士課程	学科別合計
文学部	神道	7	2	0	0	0	9
	国文	15	2	5	3	1	26
	国史	3	0	3	2	0	8
	コミュニケーション	3	11	0	0	0	14
教育学部		31	28	6	5	0	70
現代日本社会学部		23	8	5	0	0	36
学年別合計		82	51	19	10	1	163

今年度のメール登録学生は29人の、LINE登録学生は163人の計192人（昨年より46人減）と減少した。この原因としては、昨年度からも言われているが4月に行われた各学年のガイダンスでのアピール不足であると考え。例年ガイダンス後にはメール登録用紙の回収を行っているが、今年度はLINE登録が始まったということから、メール登録用紙は配布していなかった。また入口で配っているパンフレット・LINE登録用紙はガイダンス中カバンの中にしまわれてしまっている光景が多く見られる。まずは、ガイダンス前に資料を用意してくださいという声かけが必要ではないだろうか。また学生スタッフから学生へとボランティアの良さをより具体的に伝えていく必要がある。そのために、各学年に合ったDVDを上映している。実際にガイダンスを通してボランティアに興味を持ったという学生もみられる。私もそのうちの一人である。ガイダンスのアプローチの仕方にはさらなる工夫が必要である。

年間報告会でコーディネート報告をした際、四日市市社協の方から、数字にとらわれすぎではないのかという意見をいただいた。その時ボランティア登録学生の増加や、コーディネート率アップという数字にばかり囚われており、人の心と向き合うということを疎かにしていたのではないだろうか。数字を上げるということばかりを気にして、ボランティアの楽しさを伝える、ボランティアをより身近に感じてもらうという本来のボランティアルームの形を忘れてはいないだろうか。それが少なからず、参加学生の減少やコーディネート率の減少に繋がっているのではないだろうかと考えた。もちろん数字は組織を運営していく上で必要になってくる。しかし、ただ単に数字を上げるのではなく、ボランティアの良さ・素晴らしさを一人でも多くの学生に伝えるということを念頭に置いた上で、コーディネート業務を行っていかねばいけない。そのためにまずスタッフが沢山のボランティアに参加し、経験を積んでいかないといけない。それはもちろん自分の為にもなる。また、スタッフとしてボランティアに参加する学生をサポートし、ボランティアの良さを伝えることができる。人の心は人が動かせる。私達のボランティアへの想いがいつか大きな花を咲かせるように、スタッフ一同改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：文学部国史学科4年 松下 翠里】

2. ボランティアルーム企画・活動報告

HELLO ボランティア 活動報告

1. 目的

この活動は日頃、ボランティアに興味はあるがなかなか参加できない学生に対し、参加促進をすることを目的として始まった。ボランティアと聞いて参加したいが、なかなか一歩を踏み出せない。ボランティアってどんなことをするのかといった学生の疑問を解消し、ボランティアに導くことを目的とした。

2. 活動内容

昨年度は学生スタッフの初動の遅さにより、開催ができなかったため、平成 29 年度の活動内容をもとにスタッフで話し合いが行われた。その中で、ボランティアルームに学生が入りにくいという意見が近年多く見られている。入りにくいというイメージを排除しなければ、ボランティアに参加したいと思っても参加ができないのではないかと考え、平成 29 年度は教室で行っていたが、ボランティアルームにより親しみをもってもらうため今年度はボランティアルームで開催することにした。また日程についても、より多くの学生に参加してもらいたいと、全ての曜日に設定した。

活動内容としては、まずは参加者の自己紹介を行い、ボランティアルームの活動紹介を簡単に行った。そして、参加者同士で「ボランティアに対する良いイメージ・悪いイメージ」を付箋に書いて共有し、ボランティアについて考える時間を設けた。

その後、ボランティアに参加した体験談を代表スタッフが参加学生に伝えた。これはより一層参加学生にボランティアを身近に感じてもらいたいという目的で行った。

また、座談会として、先ほどのボランティアに対する良いイメージや不安が体験談を聞いてどのように変化したかや、ボランティアの不安を解消するにはどうしたらよいかなどを話し合った。最後に現在募集しているボランティアの紹介を行った。

詳しい概要、日程は以下の通りである。

開催日：令和元年 5 月 8 日（水）、5 月 10 日（金）、5 月 13 日（月）、

5 月 14 日（火）、5 月 16 日（木）

全日程 三講時目（13 時 30 分～15 時）

場所：ボランティアルーム

内容：①自己紹介

④体験談

②ボランティアルームの紹介

⑤座談会

③ボランティアに対するイメージ・不安

⑥ボランティア情報発信

企画者：4年 奥梨沙、杉木真子、松下翠里
 3年 中西正樹、渡辺楓
 2年 西出美郷、村嶋大輝、吉田綾奈

活動風景



ボランティアに対するイメージや不安を付箋に書いている様子



体験談の様子

3. 活動報告

参加者は5月10日（金）に1名の参加、残りの日は0名という結果になり、HELLOボランティアが開催されたのは1日だけという結果になった。その反省は最後にまとめる。以下の報告は5月10日（金）に行われた内容の活動報告である。

参加してくれた学生は文学部1年の男子学生であり、ルームスタッフは5名が参加し、計6名での活動となった。

ボランティアに対するイメージや不安については、付箋を利用して、イメージや不安を書き出していき、まとめるという作業を行った。

ボランティアに対するイメージや不安などは以下のような意見が出された。

ボランティアに対するイメージ	ボランティアへの不安
<ul style="list-style-type: none"> ・人を助けるためにすること ・人とのつながり ・多くの人達が関わっている ・自己犠牲 ・やりがいがある ・笑顔の輪 ・優しさが溢れる ・将来につながる 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションがうまくとれるのか ・自分でもきちんとできるのか ・年齢に合わせた対応 ・1人で参加する勇気がない ・難しそう

ボランティアに対するイメージでは、人を助けるためにすることや、人とのつながり、やりがいがある、将来につながるなどボランティアに参加すると沢山の利点があるというイメージであった。しかし、そんな利点が沢山あるボランティアに対して、自分でもきちんと役割を果たせるのか、年齢に合わせたコミュニケーションがとれるのか、1人で参加する勇気がないといったマイナスのイメージも沢山示された。

座談会でも、ボランティアに参加するには勇気があるという意見が多く、やはり多くの学生がボランティアは参加すると沢山の利点があり、自分の成長の一步に繋がるが、参加するには沢山の不安があり、勇気があるという学生が多くなるのではないかと考える。

ボランティアルームはボランティア情報を発信してだけでなく、このような不安を解消するためにボランティアルームにできることを考える必要がある。

また、その不安を受け、体験談ではルームスタッフが企画した「サマースクール」「老人ホームでLet`s文化祭」に参加した学生スタッフの体験談を聞いてもらった。また座談会では、学生スタッフから自分が初めてボランティアに参加した時どう思ったか、参加してよかったことなど実体験をもとに参加者に話しをすることで、不安の解消に繋がったのではないかと考えている。

最後に、ボランティア情報を、発信し、参加方法などの確認を行った。

4. まとめ

今回、沢山の学生に参加して欲しいということから全ての曜日に設定し、事前の呼び込みをしたにも関わらず、一般学生の参加者は5日間合わせて1名という結果になった。

今回唯一参加してくれた一般学生は学生スタッフの友達であり、その学生スタッフが連れてきてくれた。「叫んでいる」だけではなく「行動にうつす」ということが必要なのではないか。ボランティアルームに入りにくいというイメージがあるのに、ルームで行われている企画に果たして一般学生だけで参加しようとするには一体どれだけの勇気があるのか。今回のHELLOボランティアの結果がまさしくそれを表しているのではないかと思う。連れてきてくれたスタッフのように、自分たちが連れてくる、ボランティアに巻き込むといった積極性が今後ルームスタッフに必要なってくる。

また、実際の話聞いてボランティアの不安が解消したとの感想があったことから、ボランティア参加前やボランティアに参加したいと迷っている学生の心のサポートをすることで、より沢山の学生がボランティアに参加したいと思ってくれるのではないかと考える。新学期に行うのではなく、「ボランティア入門講座」「ボランティア相談会」など定期的に行っていく必要もあるのではないかと考える。この活動が学生のボランティアに繋がる架け橋となるようにしていかなければならない。

【文責：文学部国史学科 4年 松下 翠里】

くらたやま音楽祭 活動報告

1. 目的

ボランティアルームの活動には、毎年行われている企画の1つに「老人ホームで Let's 文化祭」という企画がある。しかしこの企画は、夏の企画ほど一般学生の参加率は芳しくなかった。そこで今回は、「老人ホームで Let's 文化祭」だけでなく「くらたやま音楽祭」を開催した。

これは、秋の文化祭の開催前に学生が利用者さんとより交流を深められることを目的に開催した。また音楽祭は6月で、介護体験よりも前に設定し、介護体験に行く学生がよりお年寄りと慣れ親しめるような機会を作ることも目的であった。

2. 活動内容

音楽祭では、演奏を行う前に簡単な楽器の装飾を行った。楽器の装飾では、あらかじめ完成させた手作りのマラカスに、飾りをつけていった。これは、たとえ歌うことが難しい利用者の方がみえても、マラカスを共に降ることで一緒に楽しんでもらうことを狙ったものである。この時、参加学生には利用者さんに積極的にコミュニケーションをとるようにした。演奏の曲目はくらたやま老人ホームの担当の方と話し合い、利用者さんが親しみやすいものを選んだ。はじめに、演奏の説明のためにルームスタッフのみで「かたつむり」を演奏して見せた。そして「どんぐりころころ」、「瀬戸の花嫁」、「青い山脈」を演奏したところで一度休憩をした。その後テレビ時代劇『水戸黄門』の主題歌である「あゝ人生に涙あり」と、連続テレビ小説の主題歌であった「365歩のマーチ」を全員で演奏した。

開催日：令和元年6月16日（土）14：00～15：30

場所：介護付有料老人ホームくらたやま

内容：14:00～ 開会式

14:30～ 楽器の装飾

15:00～ マラカス演奏

15:30～ 閉会式・後片づけ

企画者：4年 奥山智司

3年 渡辺楓

2年 池田千夏、中子恵里花

1年 須場聖羅、村上葵、森井洸樹

3. 活動報告

「くらたやま音楽祭」では、一般学生が4名、ボランティアルームスタッフが10名の計14名が参加した。

まずボランティアスタッフが早めに会場へ行き、会場内を装飾した。その後一般学生と合流した。楽器の装飾では、利用者さんと参加学生が協力しあって、自分だけのマラカスを作っていた。ある程度楽器の装飾が完成してきたら、休憩の時間を設けた。ここで利用者さんと参加学生はコミュニケーションを取りながら一緒にお菓子を食べた。利用者さんと参加学生の話が弾んでいる様子がみられたが、同時にやや緊張している様子も見受けられた。そして15時頃に演奏に移った。演奏会では前半と後半に分けて合計6曲行った。利用者さんも参加学生も音楽に合わせて楽しそうにマラカスを振っていた。その後、閉会式をし、後片付けをして音楽祭は終了した。

また、今回は食堂前での呼び込み、ボランティアルームスタッフによる友人への誘いかけや、SNSを活用して宣伝を行った。また、くらたやま老人ホームの担当者の方にもSNSで宣伝していただいた。

4. 活動風景



交流の様子



飾りつけをしたマラカス



演奏の様子

5. 参加学生からの声

- ・利用者の方と多く話せた
- ・全員で歌えるように工夫が必要だった
- ・盛り上がってよかったが休憩時間が短かった
- ・予定が詰まっていなかったのでゆとりを持てた
- ・耳の聞こえにくい利用者さんには自分から話すべきだった
- ・自分の周りの方としか接することができなかったが、楽しそうにしてくれた

6. まとめ・反省

今回、一般学生の参加者は昨年度の文化祭と比べ3名増加している。これは、先述した通り宣伝にも力を入れたことが大きい。来年度も、この調子で一般参加者の参加率を増やしていきたい。

当日の流れに関して、今回は基本的にスムーズに進行できた。これは、前回の反省である「くらたやま老人ホームの担当者の方との打ち合わせ不足」を踏まえた結果であると考えている。今年は、3か月前の4月の下旬から打ち合わせを開始した。そして、対面で直接会うだけでなくメールでも頻繁にやり取りをした。そのため、運営側にも余裕ができたのである。一方で、休憩時間を長く設定してしまい、利用者さんや学生の集中を切らしてしまいそうになってしまった。次は、利用者さんや参加学生の様子を見ながら柔軟に対応していきたい。

全体的な雰囲気としては、良好な状態を保っていたのではないかと考えている。しかしながら、演奏会の際、曲によって一般学生の知らない曲があり、一般学生が歌いにくいという事態が発生した。事前に曲目は伝えてはいたものの、それだけではなく次からは歌詞カードを用意するなど全員で歌えるような工夫をするべきだった。

今回は昨年度の文化祭の反省を活かされた部分がたくさんあった。来年度はより時間配分に気を配り、利用者さんや参加学生の集中を切らさないようにしなければならない。また、一般学生の参加率も増加しているので、より参加率が増えるようにさらに充実した内容を考えていきたい。

【文責：コミュニケーション学科2年 中子 恵里花】

ちょこっと福祉体験 活動報告

1. 目的

「ちょこっと福祉体験」は、伊勢市社会福祉協議会が主催する企画であり、ボランティアルームは伊勢社会福祉協議会と合同で企画・運営を行った。今年度が4回目の開催である。

活動の目的として夏季休業中の小学生、中学生、高校生を対象に活動を通して思いやりのある心を育て、福祉に関する知識や協調性を身につけてもらうという目的がある。また、参加学生には、子どもたちとのふれあいを通して接し方や場作りを学んでもらうことを目的とした。ボランティアルームとして伊勢市社会福祉協議会とのつながりを深めることも目的としている。

2. 活動内容

福祉がテーマであることから昨年度同様、参加した子ども達に福祉について学んでもらうために、車いす体験、お年寄り体験、福祉〇×クイズを行った。また、参加者の制作活動として毎年好評であるマーブリング工作を行った。

チームで分かれてから自己紹介をし、緊張をほぐすために福祉体験の前にアイスブレイクゲームを行った。今年度はさらに子どもたちの興味の引くマーブリング工作を体験の先頭で行うことで、チームの団結力を高めた。

開催日：令和元年8月6日（火）13：00～16：15

場所：皇學館大学

内容：13：00 受付

13：15 アイスブレイク（高齢者の視界体験）

13：30 ハンカチ染め（マーブリング工作）

14：30 車いす体験、お年寄り体験、福祉〇×クイズ

16：00 アンケート、記念撮影

16：15 解散

企画者：4年 杉木真子、大田芙侑

3年 山川廣太郎

2年 樋口葵、森田麻友

1年 尾崎友則、川端日南果、袖岡美菜、増井香苗

3. 活動の様子



マーブリング工作



車いす体験



お年寄り体験



福祉〇×クイズ



集合写真

4. 活動報告

参加者は、小学生9名、中学生2名の合計11名の児童・生徒、ボランティアとして参加した学生は10名、ボランティアルームスタッフ16名、計26名の参加であった。子どもたちとのふれあいが魅力である、本ボランティアを教育学部の授業で宣伝した成果もあり、教育学部の学生の参加が多かった。

今年度から本ボランティアに参加する学生に向けて「事前体験会」を開催し、活動内容やタイムスケジュールを把握してもらった。

受付の際、4つのチームに分け、それぞれで自己紹介をする時間を設けた。初めは緊張した雰囲気であったが、一つ目の体験プログラムである「高齢者の視界体験」を行ったあとは和やかな雰囲気になっていた。「高齢者の視界体験」とは、伊勢市社会福祉協議会さんからお借りした視野狭窄ゴーグルを使用し、小銭が全部で何円あるのかを手探りで当ててもらおうという体験である。この活動を行うことでチーム内の雰囲気が良くなり、積極的にコミュニケーションをとる様子が伺えた。

その後、図画工作室に移動し、チーム単位で「マーブリング工作（ハンカチ染め）」を行った。スタッフは各チームを巡回、サポートし、早く作業が終わったチームには伝言ゲームをしてもらうなどして、待ち時間にも飽きさせないよう臨機応変に対応した。

マーブリング工作後、2チームに分かれて、「お年寄り体験」、「車いす体験」をそれぞれ行った。

「車いす体験」では車いすの仕組みを知ってもらうため、はじめに車いすの押し方や障害物の越え方などを実践してみせた。スロープやエレベーターをめぐるコース、屋内で木材を用いた障害物を乗り越えるコースに分かれ、車いす体験を行った。車いすに乗る・車いすをpushの両方を体験してもらった。

「お年寄り体験」では伊勢市社会福祉協議会さんより高齢者体験キットをお借りし、子どもたちにキットを装着し、子どもたちをお年寄りの役、参加学生を介護者の役とし階段の上り下りをしてもらった。

「福祉〇×クイズ」は全体で行い、福祉に関する問題を〇×形式で15問出題して回答してもらった。例えば、「高齢者は60歳以上である」といった問題を出题した。このような福祉に関するクイズを通して、子どもたちに福祉に関する知識を増やしてもらった。

教室に戻りアンケートを記入してもらった。記入が終わった子どもから前に出て、完成したマーブリングハンカチをお披露目してもらった。16:15に解散した。

活動終了後スタッフは片付け、反省会を行った。

5. 参加者からの感想

〈子どもたちの感想〉

- ・福祉のことをクイズにしている、福祉のことを楽しく知れたのでよかったです。
- ・お年寄りはとても移動が難しいと知りました。
- ・おじいちゃん、おばあちゃんは歩くとき、どれだけ大変かをまなばせてもらいました。

〈参加学生の感想〉

- ・子どもたちだけではなく、私も学ばせてもらいました。
- ・またボランティアに参加したいと思いました。
- ・待ち時間にちょっとしたゲームをさせるなど、子どもを飽きさせず楽しませる工夫が随所に含まれていてよかったですと思いました。

6. 反省

今年度のちょこっと福祉体験の反省は2つある。1つ目はハンカチ染めの乾燥時間がやや足りなかった点である。チームの仲を深めることに加え、乾燥時間を考慮してマーブリング工作を体験の序盤にプログラムした。しかし、天気が曇ってきたこともあり、冷房や自然乾燥だけでは完全に乾かすことができなかった。次回のマーブリング工作では乾燥時間をさらに考慮して染める題材を決定する必要がある。

2つ目は各体験の時間設定に余裕がなかった点である。時間通りに進行することはできたが、「お年寄り体験」ではお年寄り役・介助者役を交代する時間はなかった。今年度初の試みである段階の上り下りには十分な安全管理が必要だったため、時間を要したと考えられる。時間に余裕をもった体験内容を企画する必要がある。

今回の反省を活かし、当日の活動をより具体的に想定した企画・準備を行うべきであると感じた。

7. まとめ

昨年の反省である「スタッフ間の情報共有不足」、「参加者とのコミュニケーション不足」を活かした企画・準備・運営を行うことができた。企画始動を早め、ミーティングやLINEグループを活用して丁寧な情報共有に努めた。また学生の不安を取り除くこと、子どもたちとコミュニケーションをとる心の余裕を持たせることを目的として、事前体験会を設け、当日の流れや体験内容を把握してもらった。さらに子どもたちに人気のある「マーブリング工作」を序盤にプログラムし、対話のない時間をなくすために待ち時間にミニゲームを行うなどの工夫をした。

次回の企画・運営を想定し、新1年生に各体験を担当させた。準備から企画、当日の活動に至るまで熱心に参加してくれたので、経験者である2・3・4年生と学年の垣根を越える連携を図ることができたと感じている。

ちょこっと福祉体験が更なる発展をし、継続して開催することができるように、今回の反省を踏まえ、次回につなげていきたいと考えている。皇學館大学ボランティアルームスタッフとしての信頼の獲得のために、一人ひとりが自覚と責任感をもった行動をしていきたいと思う。

最後になりましたが、今年度初めて開催した事前体験やその他様々な変更点にも快く協力していただいた伊勢市社会福祉協議会の皆様、参加してくれた子どもたち、学生、スタッフの皆様に感謝申し上げます。

【文責：教育学部教育学科2年 樋口 葵】

サマースクール 活動報告

1. 目的

今年度で12回目の開催となるサマースクールは、松阪市社会福祉協議会とボランティアルームが合同で企画・運営を行ってきた企画である。

この企画は、夏季休業中の小学生が対象で、福祉について理解してもらうことを主とする体験を通して、創造性や協調性を身に付けることができる内容を毎年実施している。また、参加してくれる大学生については、このボランティアを通して子どもたちとの触れ合い方や接し方を学んでもらうことを目的とした。

2. 活動内容

毎年、子どもたちに福祉について理解してもらうことを目的とし、福祉体験ゲームラリーを行っている。今年は昨年度の反省を踏まえ、点字体験が小学校低学年の児童にとっては難しく、楽しめていなかったということで高齢者体験に変更した。また、お箸を使った豆つかみも小学校低学年の児童にとってはお箸を上手く持つのは難しかった。そのため、お箸を矯正箸に変えた。

ブースの設置前や集合時間までの間、スタッフ同士、また子どもたちとスタッフ間の緊張をほぐすため、昨年度と同様にアイスブレイクゲームを取り入れることにした。

サマースクールでは毎年、4つのブースを10分ごとに回っていく「福祉体験ゲームラリー」を行っている。今年度も例年通り10分間のラリー形式で行っていくことにした。

開催日：8月9日（金） 13：00～16：00

8月22日（木） 13：00～16：00

場所：松阪市福祉会館

内容：(1)子どもたちに宿題を教える

(2)昼食

(3)自己紹介、アイスブレイクゲーム

(4)福祉体験ゲームラリー

車いす体験、豆つかみ、手話当て、高齢者体験

(5)お菓子作り

(6)終わりの会

(7)反省会

企画者：4年 中根くるみ、松下翠里
3年 才戸俊祐
2年 西出美郷、村嶋大輝、吉田綾奈
1年 坂田優、坂谷海怜、土性奈々香

3. 活動報告

一般学生の参加者は8月9日（金）が1名、22日（木）が10名であった。2年生の学生が最も多く、「ボランティアルームからのメールを読んで参加した」という参加理由や「友達から誘われて参加した」という参加理由が多かった。所属学部は教育学部と文学部が多く、教員志望の学生が多かったようである。

サマースクール開始時間までの間、子どもたちとスタッフ間との緊張がほぐれるよう、来場した子どもたちから順にスタッフと「じゃんけん列車」というアイスブレイクゲームを行った。ルールは、音楽を流しその音楽に合わせて室内を自由に歩き回る。暫くして、音楽が止まったら、近くにいる友だちとジャンケンをしていく。ジャンケンに負けた人は、ジャンケンに勝った人の後ろにつき肩に両手をかけ、どンドン列を長くしていく。そして、最後に列の先頭になった人がチャンピオンになるというゲームである。体を動かすゲームは子どもたちから好感触だったが、走ったり早歩きをしたりすると、列が乱れてしまう。それでは危険であるため、「危ないから、歩いて行おう。」と事前に約束事を呼びかけておく必要があったと思う。その後は、場の雰囲気も和みはじめ、大学生と子どもたちが打ち解けやすい場の空気づくりができたように見えた。

今回の福祉体験ゲームラリーでは、車いす体験、高齢者体験、手話当て、豆つかみの4つのブースを設けた。車いす体験では、はじめに子どもたちに車いすの組み立て方を説明した。次に、車いすを押す側と乗る側に別れ、障害物やスロープが設置されたコースを1週してもらい、役割を交代して体験してもらった。学生は子どもの後ろについてサポートし、子どもが怪我をしないよう注意を払うように見守った。高齢者体験では、高齢者体験キットをつけてもらい階段を上り下りし、トイレに座ってもらう体験をした。手話当てでは、乗り物をテーマとした手話を実演し、選択クイズ方式で手話の意味を当ててもらおうというゲームを体験してもらった。豆つかみでは、視野狭窄眼鏡や色彩眼鏡をかけて、指定された色の豆をお箸で掴むという体験をしてもらった。

学生間でも交流をするために、学年・学部の異なるグループを作り、各ブースを担当してもらった。また、サマースクールの目的の一つである「障害について知ってもらう」福祉体験ゲームラリーを行うだけでなく、ゲームラリー終了後には、子どもたちに体験して感じてもらったことや気づいたことを話し合ってもらう時間を設けた。その中には「子どもたちと一緒に自分も考え、体験することができた」、「子どもたちと一日接することができた」などの話が聞けた。

お菓子作りでは社会福祉協議会の方々のお力添えにより、焼きドーナツとみたらし団子作りを行った。オープンやガスコンロの火を扱うため、子どもたちが火傷をしないよう目配りや声掛けを注意して行った。みたらし団子作りでは、団子の形を自分の好きな形にし、楽しんでいた子どもも多く見られた。

終わりの会では、記念撮影と記念品の贈呈を行い、子どもたちにサマースクールの感想をプリントに書いてもらった。

子どもたち全員をお見送りした後、反省会を行った。参加学生を含めたスタッフ全員から感想や反省点を発表してもらい、良かった点、悪かった点を共有した。

4. 活動風景



車いす体験



高齢者体験



豆つかみ



手話当て

5. 参加学生の声

- ・子どもたちのエネルギーに圧倒された。
- ・子どもたちが楽しそうにしてくれて盛り上がった。
- ・子どもと関わる経験がなかなかないので、良い経験になった。
- ・子どもに福祉を教えながら自分も同時に学ぶことができた。
- ・子どもたちと長い時間接することができて、楽しかった。
- ・子どもたちと一緒に考え、一緒に体験することができた。
- ・子どもたちとたくさん会話できて、とても楽しかった。

6. 反省

昨年度のサマースクールでは、豆つかみのお箸を持つことや点字当ては、小学校低学年の子どもたちには難しいと感じた。中には楽しめていない子どももいた。また、サマースクールでは毎年、福祉体験ゲームラリーで車いす体験のブースが他のブースを待たせてしまう傾向があった。そのため、豆つかみのお箸は持ちやすい強制箸に変更し、点字当てと車いす体験の反省をふまえ、もう少し時間がかかるブースがあってもいいのではないかと考えた。そして、点字当てを高齢者体験に変更した。この変更によって、小学校低学年の子どもたちにも楽しんでもらうことができたと考えている。また、高齢者体験に変更したことで、車いす体験のブースだけが他のブースを待たせてしまうことがなくなった。よって、待ち時間も少なく、4つのゲームをスムーズに回すことができたと思う。

しかし、その代わりに、別の反省が出てきた。

1つ目は、高齢者体験で使う高齢者体験キットを、子どもたちに着けてあげることに慣れていない一般学生とスタッフが多かった。そのため、時間がかかってしまい、他のブースを待たせてしまった。これは、もう少しリハーサルを取る必要がある。また、参加者全員に着け方をしっかりと理解してもらう必要があると感じた。

2つ目は、お菓子作りの時間が押してしまった。これは、事前に手間のかかる作業は大学生がし、容易な作業を子どもたちに行ってもらうように、役割分担を決めておく必要があった。

3つ目は、あまり活動に参加していない学生がいる時間があった。スタッフも一般学生も時間が押してしまったことが原因である。慌てているサマースクールのスタッフを見て、どうしたら良いのか分からないという時間を作ってしまった。確かに臨機応変に動くことは大切だが、慌てなくて良いようにしっかりと事前の打ち合わせをしておくべきだったと考える。サマースクールは、学生にとって子どもたちとの触れ合いや接し方を学べる一つの機会ともなっている。そのため、スタッフが積極的にサポートへ向かい、学生たちが活動に参加しやすくなる手立てを考えなければならないと感じた。

7. まとめ

終わりの会にて、子どもたち全員にアンケートを行った。高齢者体験でお年寄りの身体の重さが分かった、ゲームをしながらいろんなことが知れた、今日作ったお菓子を家でも作ってみたいなどの感想を多く頂いた。また、子どもたちの中には、昨年が続いて今年もサマースクールに参加してくれた子どももいた。無事にサマースクールをやり遂げることができたが、サマースクールを楽しみにしてくれている子どもたちがいることを改めて確認することができた。そのような子どもたちの期待を裏切ることがないように、今まで以上に気を引き締めていきたい。

ボランティアルームスタッフは、松阪市社会福祉協議会さんのお力添えのもとに企画・運営を行っている。私達は運営の難しさだけでなく、楽しさや達成感も経験することができている。また、今年度は1年生のスタッフが初めて企画に参加し、彼らにとっても新鮮な経験になったと思われる。

今年度のサマースクールでは、各日15名までの一般学生の募集を行った。1日目は、学校の集中講義や補講期間と重なってしまった。そのため、参加学生を多く集めることができなかった。しかし、2日目は10名の参加者を集めることができた。これにより、サマースクールは、小学生だけでなく、一般学生からも高い人気があることが改めて分かった。

同時に、サマースクールは学生が初めて参加するボランティアの一つであると考えられる。今後、学生のボランティア参加を促進するためにも、今回得られた反省点をもう一度しっかりと見直したい。また、打ち合わせをたくさん重ねて、内容をより充実したものにしていきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科2年 西出 美郷】

他大学視察 in 愛知淑徳大学CCC 活動報告

1. 目的

愛知淑徳大学のコミュニティ・コラボレーションセンター、通称 CCC（以下 CCC）さんでの視察を行った。CCC は、愛知淑徳大学の学生が地域の人々とボランティア活動を通して交流し、その中で知識・技術などを学ぶことを支援する教育機関である。そして、この視察はボランティア情報を学生に提供する機関同士が交流を行い、それぞれの活動の紹介やボランティアについての意見交換を通して、ボランティアについて考えを深め、今後につなげていくために行っている企画である。また、ボランティアルームに所属してまだ日の浅い1年生スタッフがボランティア活動に対してより広い視野を持って活動してもらうための気づきを促すことを目的とした企画でもある。

2. 活動内容

毎年夏頃に行っている企画であり、昨年度同様、皇學館大学ボランティアルーム（以下ボランティアルーム）と CCC のスタッフで行った。意見を積極的に発表できるようにトークテーマを設け、グループごとにディスカッションを行った。

日時：令和元年9月10日（火） 13：30～15：00

場所：愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス コミュニティ・コラボレーションセンター内

内容：1. 自己紹介

2. 各大学の紹介

3. 各機関の紹介

4. アイスブレイク

「他己紹介：名前、これまでに参加したボランティアについて など」

5. グループディスカッション

「ボランティアの良さや必要性を一般学生に伝えるにはどうしたら良いのか」

6. まとめ

3. 活動報告

当日の参加者は、ボランティアルームスタッフ 16 名（内 1 年生 14 名）、CCC スタッフ 3 名であった。最初に自己紹介、各大学や機関の紹介を行った。そこから 3 グループに分かれ、ボランティアに関する話題を用いながらアイスブレイクを行った。その後、「ボラン

ティアの良さや必要性を一般学生に伝えるにはどうしたら良いのか」というテーマでグループワークを行った。各グループはテーマ以外にも個人的なことやお互いの大学・機関のこと、ボランティアに関してのことなども話した。そして、グループごとに意見をまとめたものの発表をし、全体で共有した。最後にセンター内を見学し、記念撮影をして会を終了した。

以下はグループワークで出された意見をまとめたものである。

○テーマ「ボランティアの良さや必要性を一般学生に伝えるにはどうしたら良いのか」

グループ①

- ・自分の周囲の人を積極的に呼び込む
- ・前回参加してもらったボランティアに関連したボランティアで呼び込む
- ・ボランティアに行く前に参加者で集まっておく

グループ②

- ・大学のホームページでどんなボランティアを募集しているかお知らせする
- ・授業の冒頭で紹介させてもらう
- ・SNSでボランティア紹介のみでなく活動、ルームでの過ごし方を発信する

グループ③

- ・ボランティアでのメリットを明確にする
- ・スタッフが同行する
- ・カテゴリーを細かくする（興味のある分野、趣味と掛け合わせる）

4. 参加者の感想

○ボランティアルームスタッフ

- ・CCCさんの話を聞いて、ボランティアに対する考え方が変化した
- ・ボランティア募集の掲示がわかりやすかった
- ・ボランティアの種類分けが細かくされていて、自分の興味のある活動に参加できる
- ・今回の経験をボランティアルームの発展につなげていきたい

○CCCスタッフ

- ・学生間の交流がしっかりできて、面白かった
- ・グループワークはもう少し長くても面白かったと思う
- ・月ボラの制度が素晴らしいと思った

5. まとめ

今回の他大学視察は開催時間が例年より1時間程短かったため、グループワークの時間を十分にとることができなかった。非常に議論が盛り上がっていたのでグループワークの時間を多く取れるよう、時間配分をしっかりと考えておくべきであった。

今年は1年生の参加者が多かったため、目的としている「ボランティア活動に対してより広い視野を持って活動してもらおうための気づきを促すこと」が達成できたと考えられる。ただし、まだボランティアに参加していないスタッフもいたので、ボランティアのイメージがつかみにくかったのではないかと思われる。少なくとも1度はボランティアに参加するよう声をかけておけば、より考えが深まりやすく充実した時間になったと考えている。

ボランティアルームではボランティアの種類分けは「子ども」「福祉」「地域」の3種類のみであるが、CCCでは大手企業と連携して行うボランティアや国際ボランティアなど、様々なジャンルのボランティアの情報を学生へ発信していた。また、地域ごとにボランティアを探すことができるので、初めてボランティアに参加する学生でも参加しやすい工夫がされていた。このような工夫もボランティアルームに取り入れていきたい。

今回の視察で学んだことや感じたことをこれからのボランティアルームにボランティアルームらしさをふまえ、取り込んでいきたい。

さらに、来年度からは1年生のスタッフの参加だけを目的とするのではなく、学年を問わず多くのスタッフに参加してもらい、ボランティアルームのさらなる発展へと繋げていきたい。そして今後、活動の目的を見直していきたい。また、たくさんのボランティアに関わっている人たちの話を聞くことで新たな考え方や自分の考えが深まることがあると考えるため、CCCさん以外にも同じような活動をしている団体を持つ大学にも目を向け連絡を取る等、積極的な交流を行っていきたい。

また、冬頃にCCCさんに皇學館大学へ来ていただいて企画を行う予定でしたが新型コロナウイルスの影響で今回は中止という形になりました。

最後に、この企画にご協力していただいた愛知淑徳大学 CCC 担当の秋田さんはじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。今後も、皇學館大学ボランティアルームがより一層精進していくためにも、交流をお願い致します。

6. 活動の様子



お互いの紹介



グループワーク



グループの意見発表



ボランティア一覧



集合写真

【文責：文学部コミュニケーション学科2年 吉田 綾奈】

東大淀地区まちづくり協議会 5周年企画 活動報告

『伊勢市の入り口』、この言葉は東大淀地区まちづくり協議会（以下：協議会）の方々にお会いした際に、初めて耳にした。

東大淀町では、少子高齢化が進み、人口減少も見られた。それにより地域の活気が失われていき、町の位置関係から『伊勢市の端っこ』と言われることもあったという。これを受け、「このままではいけない。」「町を、未来を自分たちで良くしなければ。」と活動を始動させたのが協議会である。

その活動の一環として、町の呼び方を消極的な意味合いがある『伊勢市の端っこ』から変えようと、生まれたのが『伊勢市の入り口』なのだ。「呼び方を変えることで気持ちの面から活気を持とう」という言葉に込められた思いから、『伊勢市の入り口』という言葉は、協議会の活動の本質そのものを表すものであるといえる。

その協議会が、毎年行っている地域の交流会の5周年版として企画したのが今回の企画である。5周年ということもあり、協議会内だけでなく学生の意見も踏まえて計画していきたいということで、皇學館大学のボランティアルーム、レクリエーション部にお声がけいただき、この企画に携わることとなった。

1. 目的

この企画は、東大淀町の住民が世代に関わらず交流を深めるきっかけにしてくれることを目的とした。最終的に、町に活気をもたらす契機となれば幸いである。

2. 活動内容

〈会議〉

日時：3月27日、5月12日、6月23日、8月4日

場所：皇學館大学附属図書館、伊勢市立東大淀小学校

内容：3月27日 ▶顔合わせ

▶東大淀地区について

5月12日 ▶企画内容について①（どういった企画が可能か）

6月23日 ▶企画内容について②（企画の具体的内容、必要な準備について）

8月4日 ▶企画内容について③（場所の振り分け、時間設定等）

▶イベント全体の打ち合わせ

〈企画当日〉

日時：令和元年9月21日（土） 8時～16時

場所：伊勢市立東大淀小学校 体育館

内容：芸能鑑賞会、ステージ企画（東大淀クイズ大会、カラオケ大会）、
レクリエーション（巨大かるた）、工作体験（紙飛行機・こまづくり、体験）、
演奏会

担当スタッフ：2年 岡崎優香、下野実紀、村嶋大輝

参加学生：23名（ボランティアルームスタッフ：17名）

3. 活動報告

この企画は、協議会を中心にボランティアルーム、レクリエーション部といった複数の団体の合同で進められた。さらに、私たちが携わるのは今年度が初めてであったため、前例から考え、スムーズに企画を進めていくことができなかった。よって多くの時間を、学生間の話し合い等に費やすことにした。

準備期間には、大学においてボランティアルームとレクリエーション部の学生間で当日の活動内容を話し合った。効率化を図るために担当を3つに分け、それぞれで内容をまとめる等の工夫もした。定期的に各団体の代表者が集まり、話し合いでまとめた内容の情報交換、最終決定等を行う会議も開いた。こういった流れで企画を形作っていき、準備を進めていった。

企画当日の活動は、午前に小学校の授業の一環として芸能鑑賞が行われ、児童が伝統芸能を学んだ。午後は、地域住民が誰でも参加できる交流会として開いた。工作体験、レクリエーション、ステージでのカラオケ大会や東大淀クイズ大会を行い、他にもポップコーンや綿菓子等の飲食ブースの設置や演奏会を行った。

午前の芸能鑑賞では落語家を招いて、日本の伝統芸能である落語を拝聴した。鑑賞した後に何名かの児童が実際に舞台上上がり、落語を感じる体験をした。自分が舞台上上がった、友達が舞台上上がった、という様々な形で児童の心に残る良い体験になったと思う。最後に、授業ということで児童は振り返りなどを行い、学生はサポートという形で関わった。

午後は、地域の方も会場に足を運んでくださった。工作体験やレクリエーションは、児童を対象として準備していたが、児童と一緒に来ていた保護者の方々にも楽しんでいただけた。工作体験では、大学生や保護者、児童等で折り方を確認しながら折っていくことで周囲との距離も近くなり、交流を生むことができた。さらにカラオケ大会では地域の方に、東大淀クイズ大会では世代を問わず楽しんでいただき、最後の演奏会では会場が最大の盛り上がりを見せ、住民の方々が一体となったと感じられた。

これらの活動を一体となって楽しんだことで、東大淀町の住民同士の交流を生むことが

できたと思う。こうして生まれた交流をさらに深め、広げていくことが、町に活気をもたらすことにも繋がっていくことだろう。

4. 活動の様子



東大淀クイズ大会



工作体験コーナー



飲食ブース

5. 振り返り

企画は、大きな問題なく終わった。しかし、準備期間を含めて想定通りにいかなかった場面もいくつかあったため、しっかりと振り返る必要がある。

一つ目は、スペースの確保である。事前の会議で、会場の図を見てスペースを確認していたが、会場の壁際に用具が置いてあったため想定と違い、配置に戸惑ってしまった。幸いにもスペースは足りたが、直接確認することの重要性を再認識した。

二つ目は、準備時間の確保である。複数の団体で行っていたことにもよるが、学生間での話し合いに多くの時間を費やしたため、準備にかかる時間が減ってしまった。それにより、企画の内容を変更する必要があるところもあった。この場合、余裕をもって時間を想定

する、周囲と連携して作業効率を上げる等の対策が考えられる。

これらから、適切な準備・予測ができていなかったことが分かる。直接確認し、把握しておくという準備・それぞれの作業にかかる時間を本番から逆算する予測である。今回の経験から、それらの重要性を改めて学んだ。行う内容によって準備・予測の立て方は様々だが、重要性は変わらない。そのため、これからは何をやるにしても、初めに準備・予測をしっかりと行い、見通しをもって取り組んでいきたい。

6. 本企画のまとめ

この企画は、接点のあまりなかったレクリエーション部と合同で行ったという点で、今までの活動とは違う新しい形になったといえる。このような新しい試みの中で、学生間の予定が合わない、情報共有に時間を要する等といった問題に直面してきた。しかし、その中で試行錯誤し、小学校の児童や先生方、地域の方々、協議会やレクリエーション部といった様々な団体、幅広い世代の方々と交流をして企画を進めてきた。これにより、それぞれの立場に立って物事を見る、広い視野を持つことができた。もちろん、視野だけでなくこの企画が無ければ会わなかった人とも出会えたということや失敗したことも忘れてはいけない。今回得たもの全てを糧として次の試みに挑み、成長していきたい。

最後に、この企画を計画していただいた東大淀地区まちづくり協議会の方々をはじめ関係者の皆様、協力してくださった東大淀町の皆様に感謝申し上げます。

【文責：教育学部教育学科2年 村嶋 大輝】

令和元年台風災害義援金募金 活動報告

1. 目的

新元号となった令和元年は非常に大きな台風に見舞われた年であった。

9月上旬に発生した令和元年台風第15号は、千葉県周辺に大規模な停電や建築物の倒壊に加え、死傷者数はあわせて151名の壊滅的な被害をもたらした。

台風によって被災した方々はニュースで報道されなくなった今も我々の知らないところで苦しみ続けている。そこで我々ボランティアルームは、被災した方々に1日でも早く穏やかな日常を取り戻して頂くべく、千葉県災害義援金の募金活動を実施した。

更に、千葉県災害の義援金募金活動を行った直後、令和元年台風第19号が発生した。この台風もまた三重県を含む日本のほぼ全域に渡り大規模な停電や建築物の倒壊、更に死傷者数はあわせて583名と極めて甚大な被害を及ぼし、我々にとっても他人事ではなかったと言える。千葉県災害義援金募金活動の数週間後、我々は新たに令和元年台風第19号の災害義援金募金活動も実施した。

2. 活動内容

①千葉県災害（令和元年台風第15号）

施行日：令和元年10月1日（火）

10月3日（木）

10月4日（金）

施行時間：12：40～13：10

活動場所：倉陵会館1階食堂前・6号館入り口付近

スタッフ：10～15名

企画担当者：3年 中西正樹

2年 中西涼、西出美郷、森田麻友

②令和元年台風第19号

施行日：令和元年10月29日（火）

10月31日（木）

11月1日（金）

施行時間：12：40～13：10

活動場所：倉陵会館1階食堂前・6号館入り口付近

スタッフ：8～10名

企画担当者：3年 中西正樹

2年 中西涼、西出美郷、森田麻友

3. 活動報告

今年度は特に被害の大きかった2つの台風災害への義援金募金活動を行った。

活動場所は、活動を行った昼休憩の時間に訪れる学生や教員が多いという理由から、例年通り倉陵会館1階食堂前と6号館入り口付近の校内2か所で呼びかけを行い、募金活動に参加したスタッフの人数は日によって異なったため、各日程の全体人数を半分に分け2か所に割り振った。尚、2か所のスタッフの中には必ず企画担当者を割り振り、各場所のリーダーとして現場で指揮を取らせた。

また、募金活動の施行日前に食堂前と6号館の活動許可の申請、活動に参加するスタッフの名簿、募金によって集まったお金はボランティアルームで管理せず、全額日本赤十字社へ寄付するという内容の申請を提出した。同時進行でボランティアルームスタッフに協力してもらい、何に対する義援金なのかを記載した募金箱と看板を作成し、事前にスタッフの内誰がどこに集合するかの確認、SNSによる募金活動の告知等、事前の準備を綿密に進めた。

4. 総括

千葉県災害に対しては10月1日に4,139円、3日に8,254円、4日に4,778円、合計17,271円を寄付することが出来た。台風が来ていた長期休みが終わってすぐに活動したため、募金活動に興味・関心を持った学生や教員が多く訪れてくれたのだろう。

令和元年台風第19号には10月29日に1,325円、31日に1,300円、11月1日に466円、合計3,091円を寄付することが出来た。千葉県災害よりも寄付額が少ない理由については、先に倉陵祭でも募金箱を設置していたため、募金活動による募金額が減少したと考えられる。

今年度の募金活動では、前年度の反省を活かしSNSでの事前の告知と事後報告を行った。その効果がどの程度あったかは定かではないが、募金してくれた人の中には、少なからずSNSを通してボランティアルームの活動を見てくれた人がいる筈だ。今後も、ボランティアルームを通して何か自分たちにもできることは無いだろうかと思ってくれる人が1人でも増えてくれたら幸いである。

我々にも、食堂と6号館入り口以外の更に人通りの多い場所での募金活動や校外での募金活動などまだまだ改善する余地がある。来年からは今まで通りの活動に加え、新たな事にも挑戦していきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科2年 森田 麻友】

倉陵祭模擬店 活動報告

1. 目的

ボランティアルームは今年度新しい試みとして、「第 58 回皇学館大学倉陵祭」にて模擬店と展示を出店した。こちらの活動報告では模擬店について報告させていただく。模擬店の出店目的としては、ボランティアルームの存在を身近な存在として、皇学館大学の学生や倉陵祭に訪れた地域の方々を含む多くの方々に知ってもらうこと、学生がボランティアに興味をもって参加してもらうこと、ボランティアルームの学生スタッフ同士の全体の結束を目指し親睦を深めることである。

2. 活動内容

昨年度の倉陵祭では「シュガーラスク」を販売した。シュガーラスクは 313 個販売し、46,780 円もの純利益を出した。少ない材料費で多くの数を販売したことによる大きな成果であるといえる。大きな成果があがったということは、今年度も同額か昨年度以上の純利益を出したいと考えた。

今年度は、倉陵祭実行委員会と進行具合が合わない部分があり、常に厳しい調整をおこなった。まず今の流行と昨年の模擬店を調べなおし 2 日間でいったい何が一番効率よく売れるのかを考え、議論の末平成 25 年度におこなった「玉こんにゃく」がボランティアルームのスタッフのなかで根強い人気を得ており、1 個あたりのコストは高いものの「肌寒い時期でも温かい食べ物」であり「叶先生の出身地である山形名物で出店したい」という考えがもととなり、「玉こんにゃく」の販売を決定した。

続いて玉こんにゃくの味付けについて議論した。ネットで調べた情報で自分たちで味付けをすることを前提に議論をしたが、人による味付けの違いが出ることから玉こんにゃくを購入する会社が販売している玉こんにゃく用の合わせ調味料を購入した。

叶先生より調理器具をお借りして鍋を二つ使い、一つは玉こんにゃくを茹でるために使い、もう一つは玉こんにゃくに味付けを行うものとして分けることにより、あまり洗い物を増やさないようにした。一日目は特に問題はなかったが、二日目には玉こんにゃくを入れる紙コップが無くなり追加で買い出しをした。

玉こんにゃくの調理だけではなく、スタッフをシフトで管理し展示と連携を取りながら宣伝など様々な作業を分担して販売することを決めた。

開催日：令和元年 10 月 26 日（土）

10：00～18：00

令和元年 10 月 27 日（日）

10：00～16：00

場所：皇學館大学記念講堂脇道路

内容：倉陵祭で模擬店を出店し、ボランティアルームを認知してもらうこと

販売値段：一串に三玉刺して 100 円

販売者：ボランティアルームスタッフ

責任担当者：4 年 松下翠里、村林寛隆

2 年 池田千夏、中桐優太

1 年 村林凌樹、八尾幸哉

3. 活動報告

今年度の倉陵祭も昨年同様快晴となり、外部から多くの来場者が訪れた。特に一日目はライブを行ったグループのファンが多く、とてもにぎわっていた。ボランティアルームの模擬店にも多くの来場者が訪れ、4 年生 6 名・3 年生 2 名・2 年生 9 名・1 年生 12 名が調理や販売を交代しながら行った。玉こんにゃくの作り方をテントに張り、担当スタッフが一般スタッフをサポートし、順次宣伝と販売と調理と休憩を行いながら活動した。

まず販売する玉こんにゃくの概要に移る。

玉こんにゃくの調理方法は以下の通りである。

- 1 玉こんにゃくを袋からあけて、ザルで水気をきる。
- 2 鍋Ⅰにお湯を沸かし、1 の玉こんにゃくを 5 分ほど茹でる。
- 3 茹でた玉こんにゃくをザルに入れて、水気をきる。
- 4 鍋Ⅱにタレを玉こんにゃく 1 袋につき 100 c c を入れ、3 の玉こんにゃくを入れて、ヘラで混ぜながら煮絡ませる。
- 5 色がついたら玉こんにゃくを 3 つ串に刺して紙コップに入れ提供する。

玉こんにゃくを煮からめた色は試作の時に写真を撮影しておきそれを作り方の紙にカラー印刷することで調理した人による違いが少しでもなくなるよう努力した。からは水で少し伸ばし購入者がお好みで付けてもらうシステムとした。

収支の詳細は表に示す

支出

材料費	26,996 円
出店料	7,000 円
諸経費	3,180 円
合計金額	37,176 円

収入

売上金	50,900 円
合計金額	50,900 円

支出	37,176 円
収入	50,900 円
純利益	13,724 円

4. スタッフからの意見

- ・リピーターが多かった
- ・味の評価が高かった
- ・役割分担がうまくできた
- ・在庫がもっとあってもよかった

5. 反省

今年度は倉陵祭において模擬店と展示の両方行う新たな試みをした。初めてのことも多く、反省点が浮かび上がった。

まず、一日目 314 本、二日目 195 本の計 509 本販売したが、模擬店の営業時間内に両日ともに完売となってしまう、もっと在庫を増やすべきであったと思う。

次に売り上げとしては、売れたものの原価が高く、売り上げはほぼ無いに等しいため来年度はもっと売り上げについて議論し工夫を施すべきである。

最後にボランティアルームが模擬店を通して学生や地域の方々に認知されたかといわれれば、それは否である。地域の方々からはボランティアルームについての質問もあったが、学生からは無く、ボランティアルームがどういうところなのか理解されていないのではと不安を感じた。来年度はボランティアルームを認知してもらうことに力を注ぎたいと考える。

6. 活動風景



販売風景



模擬店参加スタッフ



1日目を終えホッとしているスタッフ



2日目も無事に終了

【文責：文学部神道学科2年 池田 千夏】

倉陵祭展示 活動報告

1. 目的

ボランティアルームは今年の「第 58 回皇學館大学倉陵祭」にて展示を設けた。

これまで、倉陵祭でボランティアルームでは模擬店のみ出店していた。倉陵祭の展示は平成 24 年度以降、実施されていなかった（ボランティアルーム内にある活動報告書より）。そのため今回は以下の目的を持ち、倉陵祭の展示に参加した。

- ①ボランティアルームの存在を本学生、さらに倉陵祭の来場者の方々に知っていただく
- ②福祉体験を行うことで、障がい者の方々がどのような生活をしているか感じてもらう
- ③来場者にとってボランティアはどのようなものなのか学生スタッフが理解する

2. 活動日時・場所

令和元年 10 月 26 日（土） 10:00~19:00

令和元年 10 月 27 日（日） 10:00~17:00

皇學館大学 7 号館 712 教室

3. 活動内容

今回、メインとして二つの企画を考えた。

一つ目が視野矯正メガネと色彩矯正メガネを使った文字当てと豆つかみである。

障がい者の方との生活を感じてもらうために豆つかみは視野矯正メガネを掛け、視野を狭めて豆を箸でつかむ。さらに、レンズが赤い色彩矯正メガネを掛けて色とりどりの豆を箸でつかむという二種類の豆つかみを用意した（写真 1）。

また、文字当ては紙の中に文字のサイズが異なる言葉をちりばめ、制限時間に言葉と言葉の数を答えてもらうものである（写真 2）。

この 2 つは視覚障がい者の方が視野の狭いなかでの生活と色覚に障がいのあるなかでの生活を疑似体験してもらえるようにした。

二つ目に来場者の方々に「ボランティア」に対する思いや考え、イメージを集めて大きなボランティアの木を作った。

「ボランティア」に対する思いや考えは人によって違いがあるので、私たちボランティアルームスタッフのみならず、倉陵祭の来場者の方々の思いや考えを知ろうと考えた。

ボランティアの木に集まった言葉は本当に様々だった。「福祉」・「介護」・「思いやり」・「愛」・「経験」など様々だった（写真 3・4）。

このように多くの方からの「ボランティア」に対する思いや考え、イメージを知ることはあまりなかったが、今回の企画を通してボランティアがどのように感じられているのかを知ることができた。私たちはこれらを参考にし、皇學館大学生がボランティアに参加してもらえるような方法を考え、新たな活動へと繋げられるように活用していきたい。そして、これからも「ボランティア」に対する思いや考え、イメージを集め、そして発信していきたい。



〈写真1〉



〈写真2〉



〈写真3〉



〈写真4〉

メインの企画の他に募金活動とガイダンス動画を流してボランティアルームの活動を理解していただいた。

展示会場と模擬店会場に募金箱を設置し、集めたお金は日本赤十字社様を通して「令和元年台風第15号千葉県災害義援金募金」と「令和元年台風第19号災害義援金募金」に寄付することを考えた。今回集まった金額は2日間合わせて8,324円だった。この金額を「令和元年台風第15号千葉県災害義援金募金」に2,162円、「令和元年台風第19号災害義援金募金」に6,162円と分けて寄付した。

さらにガイダンス動画を流した。ガイダンス動画とは新学期に大学の修学指導でボランティアルームの紹介をするときに流している。ガイダンス動画は学年ごとに異なっており、写真や音楽が入っているので楽しみながらボランティアルームのことを知ってもらえるのではないかと思った。

このようにして倉陵祭の展示を行い、来場者の方々だけ体験し、知ってもらうのではなく、私たちボランティアルームスタッフもこの展示の対応などから学ぶことがあったと感じた。

4. スタッフからの意見

- ・皇學館大学生より一般の来場者の方々が多く来てくださった。
- ・体験してもらうだけでなく、どのような目的で行っているのか明確に重視していた
- ・来場者の方々に来てもらえるような工夫が必要。
- ・ガイダンス動画で教室を少し暗くしていたため体験コーナーが暗かった。
- ・何をすればいいのかわからなかった。

5. まとめと反省

今回の倉陵祭の来場者数は1日目 51名、2日目 71名、計 122名の方に来室していただいた。1日目と2日目に差がある理由として1日目は教室前に献血が行われており、ボランティアルームのブースが隠れていたことが原因の一つでないかと考えられた。

また、ボランティアルームのブースへの呼び込みをしていなかったことも一つだと考えられるが、スタッフがすぐに呼び込み用のボードを作り始め、校内へ呼び込み、さらには、ボランティアルームのブースだと分かるような飾り付けを行ってくれた。このようにスタッフ同士で考え、すぐに行動してくれたことはとてもありがたいことだった。

来場者の方々を増やすための方法として、ボランティアルームの Instagram や Twitter、LINE などの SNS があるので、倉陵祭当日だけでなく、準備段階から告知すればよかったのではないかと思った。

また、スタッフからの意見にもある、「何をすればいいかわからなかった」ということだが、実際には展示の流れをまとめた説明書を作っておき、ブース内に配置したのだが、その存在は認知されていなかった。これは情報共有ができていなかったため起きてしまったことになる。些細な情報共有のミスが今後大きなミスに繋がるかもしれない。そのためにも今後はわかりやすい場所に説明書を置いておく、その場にいるスタッフが直接説明するなど対策を考えなければならない。

最後に、今回はどのように取り組んでいけばいいのかわからない状態の中で倉陵祭の展示を行ったが、スタッフの多くの協力もあり、無事終了することができた。しかし、スタッフ同士の情報共有や来場者の呼び込み、告知などの課題が残った。その課題を次回の倉陵祭の展示でどのように改善していくのか、また、次回も同じ内容でいいのかなど吟味する箇所も多くある。それらを踏まえて、次回の倉陵祭の展示をより良いものに行きたい。

6. 活動風景



展示会場



呼び込み



学生スタッフの様子

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 2年 中桐 優太】

老人ホームで Let' s 文化祭 活動報告

1. 目的

くらたやま老人ホームでの企画は今年で4年目の開催となる。

毎年、子どもを中心とした企画は行っており、子どもが参加するお祭り、学習支援等のボランティアも多く依頼がある。しかし、福祉分野の就職を考えている学生もいるが、なかなか福祉関係のボランティアに参加する機会が少ない。そこで、老人ホームでの企画を通じて幅広い年代の方々と触れ合うことができるように、その貴重な機会としてコミュニケーションがより取りやすい環境を作れるように企画した。

昨年度までの文化祭、そして音楽祭の反省・経験を活かしながら、学生と利用者さんがより関わることのできる文化祭を目的として、企画・運営を行った。

2. 活動内容

文化祭では、最初に簡単なマラカス演奏を行った。これは音楽祭の際に、開会式のあとすぐに参加学生と利用者の方の交流をしなければならない状況になり、両者ともに緊張している様子をうかがえた。そこでまず両者の緊張を緩和できるように行った。そして今回はマラカス演奏の最後に、学生の有志でダンスを行い、利用者の方により楽しんでいただけるように、手拍子を促すような動きを取り入れた。

次にすごろくである。すごろくはスタッフの手作りであり、マスには「好きな曲」、「好きな食べ物」、「初恋の人」等、利用者さんと話すうえでの話題作りになるような質問を設けた。このときに、話を広げられそうな話は積極的に広げるようにした。

そして昨年度に引き続き、カレンダーづくりを行った。昨年度の反省でカレンダーづくりの飾りが小さい、見づらい、足りないということがあった。そして、急遽くらたやま老人ホームの担当の方に飾りを用意していただくことになり、カレンダーづくりに時間がかかってしまった。それを踏まえて、今回は準備の段階でできる限りイラストや飾りを大きく、わかりやすくした。

開催日：令和元年11月10日（日） 13：30～15：00

場所：介護付有料老人ホームくらたやま

内容：13:30～ 開会式

13:35～ マラカス演奏3曲

13:50～ 手作り双六と同時にお菓子休憩

14:20～ カレンダー作り

15:00～ 閉会式

企画者：4年 奥山智司
3年 渡辺楓
2年 池田千夏、中子恵里花
1年 須場聖羅、村上葵、森井洸樹

3. 活動報告

「老人ホームで Let's 文化祭」では、一般学生が4名、ボランティアルームスタッフが11名の計15名参加した。

演奏会と同様にまずボランティアルームスタッフが早めに会場に行き準備を行った。その後、一般学生と合流して開会式を行った。

開会式の後にはアイスブレイクとして、演奏会で作ったマラカスを使い簡単な演奏を行った。音楽祭の反省であった「全員で歌える工夫が必要だった」を活かして文化祭では、くらたやま老人ホームの担当の方に歌詞カードを用意していただき、誰でも楽しめやすいように工夫をした。この時に、音楽祭で製作したマラカスを使い、学生も利用者も楽しく演奏していた。

その後、おやつ休憩を兼ねてすごろくで遊んだ。すごろくでは、利用者さんの昔の体験談を聞いたり、当時流行った物事について、学生と和気あいあいと話している様子が見受けられた。

そして、最後にカレンダーづくりを行った。昨年度は、模造紙にカレンダーの日付を印刷したものを張り付けたものをくらたやまの担当者の方に作っていただいていた。そこにボランティアルームスタッフが作った装飾品を貼り付けていくというものであった。しかし、それでは利用者さんの座る位置によっては装飾しにくいという事態が発生した。そのため今回は、くらたやま老人ホームの担当者の方に予め、日付を印刷したものとイラストの部分を切り離してもらい、どの席からでも装飾しやすいようにした。参加学生は利用者の方が装飾する様子を見ながら、積極的に完成するように一緒に作業した。14時50分まで制作を行った。その後、閉会式をして、参加学生で後片付けを行い終了した。カレンダーは壁にかけて利用しているようである。

今回も音楽祭同様、食堂前での呼び込み、ボランティアルームスタッフによる友人への誘いかげや、SNSを活用して宣伝を行った。そして、くらたやま老人ホームの担当者の方にもSNSで宣伝していただいた。

4. 活動風景



すごろくの様子



カレンダー作りの様子



カレンダーのイラスト部分

5. 参加学生からの声

- ・カレンダーが凝っていてよかった
- ・よく計画を練っていてスムーズに進んだ
- ・利用者の方の笑顔を見れて頑張ってたよかった
- ・利用者の方が誰でも楽しめるような工夫が必要だった
- ・休憩時間に利用者の方が何をしていたかわからない時間があった

6. まとめ・反省

まず、一般参加者の参加率だが、音楽祭同様4名だった。この時、音楽祭から継続して参加してくれていたのが3名である。これは、音楽祭を開催したことによりお年寄りの方に興味を持っていただいたからだと推察している。一方で、新規での参加率は芳しくなかった。そのため学生の興味を引くような宣伝方法を考えなければならない。

次に、当日の流れに関して、音楽祭の反省を生かしてよりスムーズに進行できていた。カレンダーづくりに関して前回の反省を十分に活かし、より華やかに、そして見ごたえのあるものになったと考えている。それだけに、準備するものが多く、休憩時間に次の準備のため参加学生の全員が席を立ってしまい、利用者さんと十分な交流ができなかった。この事態

を防ぐために、準備に取り掛かる学生を指定するべきであった。

全体の雰囲気としては、参加学生や利用者さんに楽しんでいただけたように考えられる。演奏会でもアイスブレイクとして、参加学生や利用者さんの緊張がほぐれていった様子だった。しかし、休憩時間などの自由に話す場面になると、参加学生と利用者さんとの間でコミュニケーションがとり難い場面もあった。そのため、来年度からはより気軽にコミュニケーションをとれるような企画を考えていきたい。また、昨年度の反省であったスタッフ間の連携はとれていた。これは、昨年度に比べてスタッフ間の会議、くらたやま老人ホームの担当の方との会議を増やしたことによる。これにより、スタッフに心の余裕ができて比較的落ち着いて物事に対応できたと考える。

今回の企画はスタッフ自身もボランティアを楽しむことを忘れずに企画を終えることができ、改善点はまだまだあるものの、確実に進展した部分はある。これは、協力していただいた介護付き有料老人ホームくらたやまさんのスタッフの皆さん、参加していただいた利用者の方々、参加学生、スタッフのお蔭であり、感謝しなければならない。来年度もこの経験を忘れず、そして慢心せず、精進していきたい所存である。

【文責：文学部コミュニケーション学科2年 中子 恵里花】

伊勢市ボランティアセンターフェスティバル 活動報告

1. 目的

平成 28 年度から、伊勢市社会福祉協議会（以下「伊勢社協」とする）が新しいイベントを開催した。その具体的なイベント内容を議論する実行委員会に、ボランティアルームスタッフが入らせていただくことになり、代表で 4 年生の杉木が選ばれた。

イベントの目的は、近年多様化しているボランティア活動の情報を提供し、支え合いの意識を高め、市民にボランティア活動へ積極的参加を図ることである。このイベントはボランティアルームを含む伊勢市内の多くのボランティア団体にとって日々の活動を知っていただけでなく、団体同士の新たなつながりができる貴重な機会になると考えられた。

2. 活動内容

7 月より実行委員の会議が始動し、イベントの骨組みは伊勢社協が決め委員が肉付けしていくという流れで進められた。イベントのスローガンは伊勢社協の登録団体から募り「～みんなにつなげよう！ボランティアの輪！～」が選ばれた。

イベントには伊勢市ボランティアセンターの登録団体がブースを出展することになった。さらに、ステージで 8 団体が実演し、日々の活動等を紹介することになった。

また、災害時における電気自動車からの電気供給デモンストレーション、災害救助車両展示、バルーンアート体験、茶の湯体験、子ども向けのスタンプラリー等を実施することに決定した。

日時や詳しい内容は以下の通りである。

開催日：令和元年 11 月 24 日（日） 9：45～14：15

場所：伊勢市ハートプラザみその

主催：伊勢市社会福祉協議会

内容：1) オープニングセレモニー（光の街奉献団 子ども木遣り）

2) ボランティアセンター登録団体ブース出展

3) ステージ実演

4) 地域貢献ブース

5) 関係団体ブース出展

6) 茶の湯体験

7) 電気供給デモンストレーション

8) 災害救助車両展示

- 9) 三重県歯科衛生士会ブース
- 10) バルーンアート体験
- 11) 三重ボランティア基金ブース
- 12) 羽毛プロジェクトブース
- 13) キャラクター大集合
- 14) ボラセン GO!! (体験型スタンプラリー)
- 15) フードコート
- 16) 就労支援施設販売コーナー
- 17) 閉会セレモニー (三重とこわか国体・三重とこわか大会伊勢市実行委員会)

当日に向けてボランティアセンターフェスティバルの実行委員会が数回行われ、そこではパンフレットの構成や子ども達のスタンプラリーの回り方はどうしたらよいかを協議した。具体的な内容まで協議したため、円滑に進むことができた。

「ボラセン GO!!」と題したスタンプラリーでは、今年度から小学生の対象から全世代対象となった。子ども達だけでなく様々な方が福祉を学んでいくことのできるブース出展が行われた。

3. 活動報告

イベントの来場者数は、3,300人以上と発表された。スタンプラリーとの相乗効果で来場者の年齢層は幅広く、会場は大いに賑わった。

ボランティアルームからは、ブースでの接客役とイベント運営係としてスタッフ 8人が参加した。イベントの運営係として主に任された仕事としては、スタンプラリーの用紙の配布、ボランティアルームの説明、総合案内所での対応、カメラ係等であった。多様な役割を担ったことにより、ボランティアルームのスタッフは多世代の方と係を通して交流を持つことができたと感じた。

ボランティアルームが出展したブースでは皇學館大学が様々な形で地域住民さんに関わりを持っていると感じた。去年のボランティアルームの説明が手薄になったという反省を活かし、「皇學館大学ボランティアルームは学生とボランティアを求めている人をつなげる役割をしています」という文を読んでもらい、そこから説明に入っていくこととした。しかし、ブースに足を運んでくださる方は少なく、もう少し来場者にアプローチしていくことが大切であると感じた。

4. まとめ

伊勢社協が主催しているイベントの実行委員会にボランティアルームスタッフを参加さ

せていただいたこと、そしてブース出展をさせていただいたことは、ボランティアルームにとってとても重要な経験になったに違いない。皇學館大学は伊勢市で認知度があるが、ボランティアルームは伊勢市にあるにも関わらず伊勢市での認知度が低く、それを問題視してきた。今回のイベントでは、伊勢市に住む方々に直接自分たちを紹介し、伊勢市で活躍している団体とつながるきっかけになった。だが、このきっかけを活かすことができなかつたと考える。今後このイベントに参加させて頂けるのであれば、ボランティアブースを出展している他の団体さんと交流していくことが大切であると考え。今まで関わりのなかつたボランティア団体とコミュニケーションをとり、ボランティアルームの存在を知っていただくことで新しい刺激をもらい、次世代を自分たちが担っていくということを直に感じ、成長のきっかけを得ることができると考える。

ボランティアルームの力はまだまだであるが、地域のために自分たちが力を発揮できるよう、若者の先頭に立ち人々の輪を広げるサポートをすることこそがボランティアルームの使命であると改めて感じたイベントであった。

5. 活動の様子



【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 4年 杉木 真子】

「倉田山お掃除企画」活動報告

1. 目的

倉田山お掃除企画は以前、毎年行われていた企画である。しかし、このところ開催されていなかったために3年ぶりの企画となった。この活動は大学の一般学生と皇學館中学、皇學館高校の生徒を対象にボランティアを募集している。通学路を歩きながら普段は通り過ぎてしているゴミを拾い伊勢の知らなかった一面を知り、地域を振り返るきっかけにする、また現役大学生と中学生、高校生が直接交流することで将来の進路の明確なビジョンを作るきっかけにしてくれることを目的としている。

2. 活動内容

事前に皇學館高校のインターアクト部と連絡をとり企画の説明、参加者の名簿の作成を行う。皇學館高校、皇學館大学の学生が連携し2班に分かれ清掃活動を行う。皇學館大学からイオン伊勢店までの方面のコースと五十鈴ヶ丘駅までのコースを掃除する。事前にルームスタッフがコースの下見を行い往復1時間以内ですむコースを決定する。そしてゴミは燃えるゴミ、缶、ビンの三つに分別し清掃を行う。軍手、火ばさみ、ゴミ袋、水はルームスタッフが準備しておく。また参加してくれたお礼として一人一人お菓子を用意した。

最後にアンケートを書いてもらう。

開催日：令和元年12月7日(土) 14:30~16:50

場所：①皇學館大学からイオン伊勢店までのコース

②皇學館大学から五十鈴ヶ丘駅までのコース

内容：14:30 521教室集合(班分け、自己紹介、注意説明)

14:50 清掃開始

16:30 集合、結果報告

16:50 アンケート記入、解散

企画者：4年 服部悠馬

3年 中西正樹

2年 岡崎優香、下野実紀、濱口奈々花

1年 勝俣未結、黒田結規

3. 活動の様子



4. 活動報告

皇學館高校と皇學館中学校の両方から生徒を募る予定であったがテスト期間や行事を避けて日程を決めると両方から募集をすることは難しかった。結果、皇學館高校のインターアクト部の6名とボランティアルームスタッフ7名教員3名の計16名で行うことになった。想定では16:50までの予定でしたが参加した生徒の塾の時間などの都合があったので急遽16:00までとした。

521教室に集合しコースの説明とチーム分け、自己紹介の時間を設けた。インターアクト部さんは初めから和やかな雰囲気だったのでルームスタッフともすぐに打ち解けてくれた生徒が多かった。コースは予定通り皇學館大学からイオン伊勢店までのコースと皇學館大学から五十鈴ヶ丘駅までのコースに分かれて行った。大学を出てすぐのところにはゴミはそれほど多くはなかったが伊勢西インターの周りの歩道など普段人があまり通らない場所には予想以上に多くのゴミがあった。清掃中にできるだけルームスタッフと参加学生だけで固まらないように積極的にコミュニケーションを取り大学についての不安や楽しみなどいろいろなことを話すことができた。日が暮れる前に再び512教室に集合し参加者たち

にはアンケートを書いてもらいプレゼントを渡した。2班で集めたゴミは満杯になったゴミ袋が4袋以上になった。自分たちが普段利用している道にこれほど多くのゴミが落ちていることに改めて気づくことが出来た。

5. 参加学生からの感想

- ・思ったよりも多くゴミが落ちていたのでびっくりしました。
- ・大学生とお話できて楽しかった。
- ・掃除したことによりすっきりとした気持ちになった。
- ・来年も開催してほしい。

6. まとめ・反省

今回参加していただいた皇學館高校のインターアクト部の皆さんがとても和やかな雰囲気を作ってくださったこともあり、参加してくれた学生さんとは2班とも良いコミュニケーションが取れたと思う。反省点としては参加してくれた学生が少なかったことである。もともとは皇学館中学の生徒にも参加してもらうつもりだったが定期テストの期間をさけて日程調節を行うとやはり高校と中学校の両方から生徒を募ることは難しかった。その分大学での一般学生の募集に力を入れるべきだったがルームスタッフ全員での打ち合わせの時間があまりとれず大学での募集のチラシ作りや呼び込みなどの時間がなかったことから今回は一般学生の参加が0人となってしまった。また倉陵祭後の片づけが企画の1週間前に行われており一部のコースが想定していたよりもゴミが少なくなっていた。コースの下見もスタッフで行ったがスタッフ7人中3人しか道を知らないという状況になってしまった。実際は3人だけでも十分かもしれないが、参加してくれている人達が安心できるのにはスタッフ全員がなんでも知っているという状態が望ましいと思うので、全員で情報を共有しておくべきだったと思う。

【文責：コミュニケーション学科4年 服部 悠馬】

令和元年度ボランティアルーム年間報告会

1. 目的

ボランティアルームの1年間の活動を、各企画の代表者を中心に報告し振り返る。1年間の活動を振り返り反省することにより、今後の課題を明確にし、目標を立て来年度の活動を意義あるものにするを目的としている。また、各企画などの活動を全学年スタッフで振り返ることにより、企画担当者以外の全員が活動内容への理解を深めることをねらいとする。

2. 活動内容

毎年2月頃にお世話になっている伊勢市社会福祉協議会さん、三重県社会福祉協議会さん、松阪市社会福祉協議会さん、四日市市社会福祉協議会さんをお呼びして、令和元年度に行った企画・ボランティアの報告・反省を一企画ずつ行い、ボランティアルームが今年1年間でどのような活動・企画をしてきたのかを報告し、質問やアドバイス等を頂き、来年度に活かせるようにと計画した。また全報告が終了したあとに、各社協の方々と学生スタッフでグループに分かれて、「つなぐ役割を強化するには」をテーマに各グループで討論し、発表することにした。

開催日時：2月6日（木）13時30分～16時00分

場所：皇學館大学 721 教室

内容：①代表あいさつ

②コーディネーター報告

③今年度の取り組み

- ・HELLOボランティア
- ・季刊誌
- ・令和元年台風災害義援金募金活動
- ・倉陵祭（模擬店・展示）
- ・アンケート結果報告

④企画

- ・老人ホームでlet`s文化祭
- ・倉田山清掃

⑤連携

- ・ちょこっと福祉体験

- ・サマースクール
- ・東大淀まちづくり協議会 5周年企画
- ・他大学視察
- ・伊勢市ボランティアセンターフェスティバル

⑥交流会

⑦代表あいさつ

⑧教員あいさつ

企画者：4年 杉木真子、松下翠里

3年 中西正樹、渡辺楓

2年 岡崎優香、山川菜月

1年 増井香苗、村上葵

3. 活動報告

当日は5名の方に参加していただいた。名簿は以下の通りである。

- ・伊勢市社会福祉協議会 中世古さん
- ・松阪市社会福祉協議会 中西さん
- ・三重県社会福祉協議会 北出さん
- ・四日市市社会福祉協議会 安田さん、中西さん

代表のあいさつとして文学部国史学科4年の松下翠が集まっていた方々に挨拶をした。次にコーディネート報告、今年度の取り組み、企画、連携と順に活動報告をしていった。各報告、反省については報告書にて記載してあるため、ここでは当日の発表者とともに簡単に企画の内容についてまとめていきたいと思う。

- ・コーディネート報告 (文学部国史学科4年 松下 翠里)

今年度のメール登録学生の数やボランティア件数、ボランティア参加学生の数など今年度のボランティアルームのコーディネート活動についての報告を行った。

- ・HELLOボランティア (文学部国史学科4年 松下 翠里)

ボランティアを初めてする一般学生の不安解消。また、ボランティアを身近に感じてもらうことを目的とした企画。

- ・季刊誌 (教育学部教育学科2年 山川 菜月)

学生用(夏・秋・冬号)はとしては20部。社協用(夏・秋号)には40部ずつ作成し、ボランティアへの参加促進やボランティアルームの存在・活動を知ってもらうために発行している。

- ・令和元年台風災害義援金募金活動（文学部コミュニケーション学科2年 森田 麻友）
令和元年台風15号により発生した千葉県災害。1日でも早い復興のために学内で募金活動を行った。
- ・倉陵祭【模擬店】（文学部神道学科2年 池田 千夏）
10月26日、27日に開催された倉陵祭にてボランティアルームは玉こんにゃくを販売した。その売り上げの一部は被災地の復興の為に日本赤十字社を通じて寄付させていただいた。
- ・倉陵祭【展示】（現代日本社会学部現代日本社会学科2年 中桐 優太）
「豆つかみ」と「文字あて」を行った。
- ・アンケート報告（文学部国史学科2年 下野 実紀）
ボランティアに対する意識調査を図り、今後のコーディネイト業務に活かしていくこと。また、ボランティアルームのサービス向上と学生のニーズを図るために行っている。
- ・老人ホームでLet`s文化祭（文学部コミュニケーション学科2年 中子 恵里香）
高齢の方々と触れ合う機会を増やすために、介護付老人ホームくらたやまさんと合同で開催している企画。今年度は春と秋の2度開催した。
- ・倉田山清掃（現代日本社会学部現代日本社会学科3年 中西 正樹）
皇學館高校、皇學館大学の生徒が連携し2班に分かれて清掃活動を行った。
ゴミ拾いを行いつつ、高校生と大学生の交流を目的とした。
- ・ちょこっと福祉体験（教育学部教育学科2年 樋口 葵）
夏休みに小・中・高生の児童・生徒達と一緒に福祉について学ぶため、伊勢市社会福祉協議会さんと合同で行っている企画。今年で4回目の開催となる。
- ・サマースクール（文学部コミュニケーション学科2年 西出 美郷）
夏休みに福祉について小学生と楽しく学ぶために、松阪市社会福祉協議会さんと合同で行っている企画。今年で12回目の開催になる。
- ・東大淀まちづくり協議会 5周年企画（教育学部教育学科2年 村嶋 大輝）
東大淀小学校にて、まちづくり協議会さんと皇學館大学レクリエーション部、ボランティアルームが協力して東大淀町5周年イベントを企画・開催した。

・他大学視察（文学部コミュニケーション学科2年 吉田 綾奈）

他の大学でボランティアルームと同じように学生が主体となって活動している大学と交流することによって、コーディネートの方法であったり、ボランティアに対しての考え方を意見交換することによって、今後のボランティアルームにも活かしていこうと企画。今年度は愛知淑徳大学の CCC さんと夏と春の2回交流を行った。

・伊勢市ボランティアセンターフェスティバル

（現代日本社会学部現代日本社会学科4年 杉木 真子）

ボランティアルームスタッフ8名と一般学生1名が運営スタッフとして参加し、ボランティアルームのブースや総合案内等の活動を行った。

次に交流会として6グループに分かれて、「つなぐ役割を強化するためには」について話し合い発表しあった。

ボランティアルームでは、ボランティアを依頼してくださる方とボランティアに参加したい学生とをつなぐ役割を担っている。そこで、スタッフによるミスがあってはならない。今一度スタッフとしての自覚を持ってもらうために「つなぐ役割を強化するには」について話し合い、コーディネートのプロである社協の方々に教えていただこうと企画した。

話し合いの中で各チームまずは自分が思うつなぐ役割を強化するにはどうしたら良いかを考え、それを発表し各チームで考えをまとめてもらった。以下はそのときに出された意見である。

〈三重県社会福祉協議会班〉

学生と活動対象をつなげる役割をしっかりと行う。

そのためにも、まずはルームスタッフが積極的にボランティアに参加し、モデルになることが大切である。

〈松阪市社会福祉協議会班〉

ボランティア活動を行うに至るプロセスの構築を一般学生とルームスタッフが共に考えることがつなぐ役割強化につながる。

〈伊勢市社会福祉協議会班〉

インスタグラムなど、SNS等を利用し、学生にボランティア情報を広める。

〈四日市市社会福祉協議会班①〉

情報共有をしっかりと行い、コミュニケーションをとる。

「友達と一緒に」などきっかけの窓口を広げていく。

〈四日市市社会福祉協議会班②〉

ボランティアを知ってもらうことから、魅力を伝える。また、実際に体験してもらい、イメージ改善などを行う。

〈学生班〉

ボランティアを求める人と接する機会を増やす。
友達をボランティアに誘う。

ルームスタッフの中でもこのように自分の意見を言うという機会はなかなかないため、
すごく貴重な場になったのではないかと思います。

話し合いを行うことにより、どうすれば一般学生がボランティアに興味を持ち、参加したいと思ってもらえるかについて考えることにより、ボランティアに対する意識が高まり、つ
なぐ役割をするルームスタッフの重要性を改めて実感することが出来たと思う。だからこ
そ、スタッフ間での情報共有不足はあってはならない。ボランティアを依頼して下さる方と
参加したいという学生のためにも、より一層気を引き締めて活動していこうという意識づ
けにもつながったのではないかと思います。

最後に代表あいさつとし現代日本社会学科 4 年の杉木真子が、教員あいさつとして叶先
生より挨拶をいただき終了した。

4. 活動風景



報告の様子①



報告の様子②



交流会の様子①



交流会の様子②

5. まとめ

ボランティアルームは、社会福祉協議会さんや介護施設などからボランティアの依頼を頂き、それを学生に伝えるというボランティアを求める人とボランティアをしたい人を繋げる役割を行っている。

報告会では、今年度のボランティアルームの企画や活動について報告をした。報告をすることによって、1年生や企画に中心として携わっていない人達にもより詳しく企画について情報を共有できたのではないかと思います。しかし、いくつかの企画において反省点として「スタッフ間の情報共有不足」という課題が挙げられている。スタッフでの情報共有がきちんとできていないとコーディネート活動もきちんとできない。今後は「報告・連絡・相談」をきちんと行い、情報を共有していくことをまずは心がけていきたい。

また、社協の方々からコーディネートの方法であったり、私たちもボランティアルームと同じ悩みがあるといったように質疑・応答の時間や交流会を通してお話することによって、スタッフ一人一人が改めてボランティアルームについて、またスタッフとしての自覚を見つめ直す良い機会になったのではないかと思います。報告会でスタッフ一人一人が感じたことをルームに持ち帰り今後のボランティアルームの活動に活かしていきたいと思う。

最後になりましたが、ご多忙の中参加していただいた伊勢市社会福祉協議会さん、三重県社会福祉協議会さん、松阪市社会福祉協議会さん、四日市市社会福祉協議会さんに、スタッフ一同感謝を申し上げます。今後も、皇學館大学ボランティアルームがより一層精進していくため、ご指導の方をよろしくお願い致します。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科2年 岡崎 優香】

季刊誌 活動報告

1. 目的

季刊誌は学生用と学外用の 2 種を作成し、ボランティアルームの存在やボランティアについての情報発信を共通の目的として内容を考えている。

皇學館大学の学生用の季刊誌にはボランティア情報や参加した学生の声、ボランティアルームの説明を入れ、初めてボランティアをするという方からボランティア経験者の方まで幅広い学生にボランティアの参加を促すことを目的としている。社会福祉協議会等を通じ配布している学外向けの季刊誌には、ボランティアルームの概要や活動内容に重きを置き、ボランティアルームの存在・活動を地域の方々に知ってもらえるような内容にしている。

2. 活動内容

季刊誌を発行するにあたってミーティングを行い、担当者と相談しながら年間スケジュールを立てた。季刊誌の各担当同士でどのような内容にするか、SNS を利用して情報を共有し合いながら、学生用(夏号・秋号・冬号)の 3 号、学外用(夏号・冬号)の 2 号を発行した。

学生用は昨年度 20 部発行していたが、部数が少なく手に取るのを遠慮するかもしれないという意見があったため、今年度はどの号も 30 部発行することに決めた。「見る人がワクワクするように分かりやすく読みやすく」をモットーに、今年度からボランティア初心者の方に向けた経験者のインタビューや月別ボランティアの紹介を掲載した。

学外用の季刊誌は今年度から新たに四日市社会福祉協議会を加えた三重県社会福祉協議会、松阪社会福祉協議会、伊勢社会福祉協議会、伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの 5 団体に向けて 10 部ずつ発行した。シンプルに誰が見ても分かりやすいように内容を心掛けた。ボランティアルーム主催の企画や子ども・地域・福祉・随時のボランティアの紹介、ボランティアの依頼方法などを掲載した。

発行する際にはメール配信や LINE などの SNS を利用してアプローチをし、季刊誌の反響を知るためにアンケートの担当者に質問の依頼をした。

3. 活動報告

学 生 用	発 行 月	発 行 部 数	残 部
夏号	7 月	30 部	1 部
秋号	11 月	30 部	19 部
冬号	1 月	30 部	28 部

今年度も2号館1階のボランティアルーム前と6号館1階の掲示から学生が自由に手に取れる形で配布した。夏号は、倉陵祭の展示で一般の方も配布した。

学生用の残部数を見ると、夏号は29部配布できている。しかし秋号と冬号に至っては11部、2部となっており、配布数は昨年と同様発行部数の半分以下という結果となった。

今年度は発行予定時期を少し早めに設定したが、秋号と冬号に関しては発行が遅れてしまった。そのため、発行期間が短くなったり長期休みと被ってしまったりするなど、学生の目に触れる機会が少なくなったことが原因と考えられる。また、担当者のスケジュールを考え余裕をもって発行できるようにし、その号の担当者に任せきりにするのではなく、積極的にコミュニケーションを取り、協力し合いながら制作していかなければいけないと強く感じた。担当者を一人にするのではなく、2人などの複数にして分担して制作した方が良いのか今後話し合っていきたい。

アンケートは18名の方に回答してもらい、季刊誌は約4割の人に認知されていることが分かった。まだまだ広く認識されていないため、季刊誌の配布方法を今一度考え直し、学生にとって一番良い方法をアンケートなどで反応を見ながら、探していきたいと思う。

4. 反省と課題

1) 発行部数について

昨年度

学 生 用	発 行 部 数	残 部
夏号	20部	5部
秋号	20部	13部
冬号	20部	12部



今年度

学 生 用	発 行 部 数	残 部
夏号	30部	1部
秋号	30部	19部
冬号	30部	28部

学生用の発行部数は20部から30部にしたが、昨年度より夏号が少し多く配布できただけで、秋号と冬号はあまり変わらなかった。メール配信やLINEなどのSNSを利用してアプローチをかけたが、あまり効果がなかった。けれども、学生に配布した数は増えているため、他のアプローチ方法を考えながらしばらくは様子を見たい。配信する際の文面を変え、掲載の内容を大まかに紹介するなどして目につくような工夫をしていきたいと思う。

学外用は5団体に10部ずつ発行したが、どのくらい必要なのか今までそれぞれの団体に聞いていなかったため、各社会福祉協議会に訪問する際に聞いておく必要がある。

2) 内容について

より良いボランティアの情報誌を目指していくために、学生用は社会福祉協議会や他大学のボランティア活動をしている団体のボランティア情報誌から良いものを吸収して、知りたいと思える情報や掲載方法を季刊誌の担当者を中心に深く思索していきたいと思う。今の学生がどのようなボランティアの情報を求めているのかアンケートを重ねて検討していきたい。

学外用には学生用と同様にボランティア経験者のインタビューを掲載し、半期ごとのボランティア情報の一覧掲載も良いではないかと考えている。

3) 配布方法について

残部は昨年度とあまり変わっていなかった。今年度までは紙媒体のみで季刊誌を発行してきたが、LINE 配信も始まったため発行する際には PDF を用いてデジタルでも掲載し、気軽に季刊誌を読めるような、多くの人目に留まるような工夫をしていきたい。来年度への改善点として取り上げ、担当者で考えていきたい。

学外用について社会福祉協議会からまちづくり協議会さんにも配布してはどうかという意見を頂き、この件についても担当者と相談しながら検討していきたいと思う。

5. まとめ

今年度は昨年度の反省や課題から発行部数や掲載内容、アプローチの仕方などを新しくした。掲載内容や配布方法についてはまだ変えられるところは沢山あると考えている。また、担当者全員が集まる機会を作り、意見を出し合いながら全員がそれぞれの号に目を通し、納得できる 1 冊にしていきたいと思う。「見やすい・分かりやすい・読みやすい」を追求し、見る人のニーズに合った季刊誌を目標にしていきたい。

【文責：教育学部教育学科 2 年 山川 菜月】

3. アンケート報告

令和元年度アンケート報告

1. 目的

今年度もボランティアルームの活動に対するアンケート調査を行った。アンケートを行う目的としては、学生のボランティアに対する意識調査を行い、それを今後のコーディネート業務の指標として活かしていく、またボランティアルームのサービス向上と、学生のニーズを知り、利用者を増やしていくことを目的としている。

2. 活動内容

昨年に引き続き、メール配信、Twitter 登録者によるアンケート調査と、今年度から新たに、LINE、Instagram 登録者に向けたアンケートを実施した。それに加え、アンケート期間中のボランティアに参加した学生にも紙媒体のアンケートを配布した。

アンケート項目としては新しく SNS による情報発信の利用状況、季刊誌の認知度、また昨年度と比べ、本学の学生がボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームはどうあるべきかということに重点をおいてアンケートを行った。

内容は以下の通りである。

開催日:2019年12月24日(火)~2020年1月28日(火)まで

対象者:メール登録者 28名

LINE 登録者 159名

Twitter フォロワー者 654名

Instagram フォロワー者 224名

アンケート期間中のボランティア参加者 2名

方法:Google フォームを活用しアンケートを作成。メール配信、LINE、Twitter、Instagram にてアンケートを実施した。また、アンケート期間中にボランティアに参加してくれた学生に対しては紙媒体の物で協力をお願いした。

アンケート内容:アンケート項目は以下の16項目になる。

- ① 学年・学科
- ② メールや SNS 等でボランティアルームを登録しているか
- ③ ボランティア情報は利用しているか
- ④ 利用していない理由
- ⑤ 今年度ボランティアルームを通してのボランティア参加率
- ⑥ ボランティアルームを通して何回ボランティアに参加したか

- ⑦ ボランティア情報の入手方法
- ⑧ 参加したボランティアの感想
- ⑨ 独自でのボランティア参加率
- ⑩ 月別ボランティアの認知度
- ⑪ 季刊誌の認知度
- ⑫ 食堂前等でボランティアの呼び込みしていることの認知度
- ⑬ 今後参加してみたいと思うボランティア
- ⑭ ボランティアとは
- ⑮ ボランティアルームスタッフの印象
- ⑯ ボランティアルームに対する意見

3. 結果報告

メール登録者 28 名と LINE 登録者 159 名、Twitter フォロワー者 654 名、Instagram フォロワー者 224 名に対してアンケートを行った結果、得られた回答数は 16 件、またアンケート期間中に、ボランティアに参加してくれた学生 2 名の方に紙媒体のアンケートを渡した結果、2 部回答があり合わせて計 18 件の回答が得られた。昨年度のアンケートは、メール、Twitter 登録者、紙媒体の方のみのアンケートで 38 名の回答であり、Instagram、LINE 登録者を含めたにも関わらず、昨年度と比べると半数以下という結果となった。

また、回答数についての反省は「4 反省・まとめ」で記載している。答えてくださった 18 件の意見は、ボランティアルームをよりよくするための貴重な意見となったので、順に結果を示していく。

① あなたの学年・学科を選んでください。

A:1 年	11 人
B:2 年	4 人
C:3 年	2 人
D:4 年	1 人

A:神道	1 人
B:国文	9 人
C:国史	1 人
D:コミュニケーション	1 人
E:教育	2 人
F:現代日本社会	4 人

学年では「1 年生」と「2 年生」が多く、学科では「国文学科」が最も多く、次いで「現代日本社会学科」という結果になった。

学年に関しては、メール、LINE 登録者合わせて 187 名の内訳としても、1 年生が 77 名、2 年生が 75 名と大半を占めているためこのような結果になったと考える。

メール、LINE 登録者を学科別で見ると教育学部が 79 名と最も多く、次いで文学部が 74

名となっている。今回のアンケート結果では、国文学科が一番多かったがその理由として、友人を誘いボランティアに参加したことや、教員志望の学生が多く興味があるからではないかと考える。

② メール配信や SNS などでボランティアルームを登録していますか。

A:登録している	15 人
B:登録していない	3 人

ボランティアに参加する際登録するため、「登録している」と答えた人が多いと考える。しかし、登録していないがアンケートに答えてくれた人も若干数いることから、情報の拡散の効果や、ボランティアが気になるが参加できていない層がいると考える。この層に、ボランティアに参加したいと思ってもらえるような情報発信をしていくことが今後の課題である。

③ ②で「はい」と答えた方に質問です。

メールや SNS などで送られたボランティア情報は利用していますか。

A:はい	13 人
B:いいえ	2 人

利用していると答えている人が多く理由としては、新たに始めた LINE や SNS の効果が大きいのではないかと考える。LINE は特に身近なツールであり、Twitter や Instagram については拡散するのに最適なツールである。だが、メールや LINE、掲示板はボランティア情報を随時発信しているものの、Twitter や Instagram の情報発信の更新度は高いとはいえないところがある。それはメールや LINE のように、個人に送るものではなく、不特定多数の人に見られることから、全てのボランティア情報を載せることは難しいところにあると考える。しかし、Twitter や Instagram の登録者はメールや LINE より多く拡散力も大きいので、多くの学生に情報を届けるためにも、掲示する際は許可を取り、可能であればその拡散力を生かし、Twitter や Instagram でも今後より多くの情報を発信していくことが大切であると考えます。

④ ②で「いいえ」と方は、利用していない理由を記入してください。

- 忙しい
- 活動時間と用事が被っているから
- 機会がなかった

上記の意見については、部活動やアルバイト、講義等があり、参加したいができないのではないかと考える。スケジュールを開けるためにも、早めの情報発信、長期休みを利用したボランティアを掲示や呼び込み等でお知らせし、ボランティアに参加しやすくする必要があります。

- ⑤ 今年度、ルームを通してボランティアに参加しましたか。

A:はい	13人
B:いいえ	5人

- ⑥ ⑤で「はい」と答えた方は何回ボランティアに参加しましたか。

またどの種類のボランティアに参加しましたか。

A:1, 2回	8人
B:3, 4回	4人
C:5回以上	1人

A:地域	1人
B:福祉	7人
C:子ども	5人

今年度参加したという学生が多い一方で、参加したいができない学生も多くみえる。

参加の回数については、ルームを通してボランティアに参加する学生が多く、その人はリピーターとなり、アンケートに回答してくれていることが分かった。リピーターに関してはルームでの仕事中でも、友人と一緒に参加する学生や、参加するのが2回目だと話す学生が以前よりも増えたように感じる。ボランティアを楽しく感じ、また参加したいと思えるよう、より一層丁寧なコーディネートで学生スタッフ一人一人が心がけることが必要である。参加した種類については、昨年度は「子ども」が一番多かったが、今年度は「福祉」が多い結果となった。理由として、有料老人ホームくらたやまや、社会福祉協議会等の合同企画のボランティアや講座等で福祉に興味を持ち、参加してくれた学生が多いからではないかと考える。次いで多い「子ども」のボランティアも長期休みに開催されることが多く、そのことから合同企画や、長期休みなどが参加しやすいと考え、呼び込みや積極的な情報の発信が大切になるだろう。

- ⑦ ⑤で「はい」と答えた方に質問です。

ボランティア情報はどこで手に入れましたか。

A:知り合いから	3人
B:SNS	6人
C:掲示板	4人
D:メール配信	0人

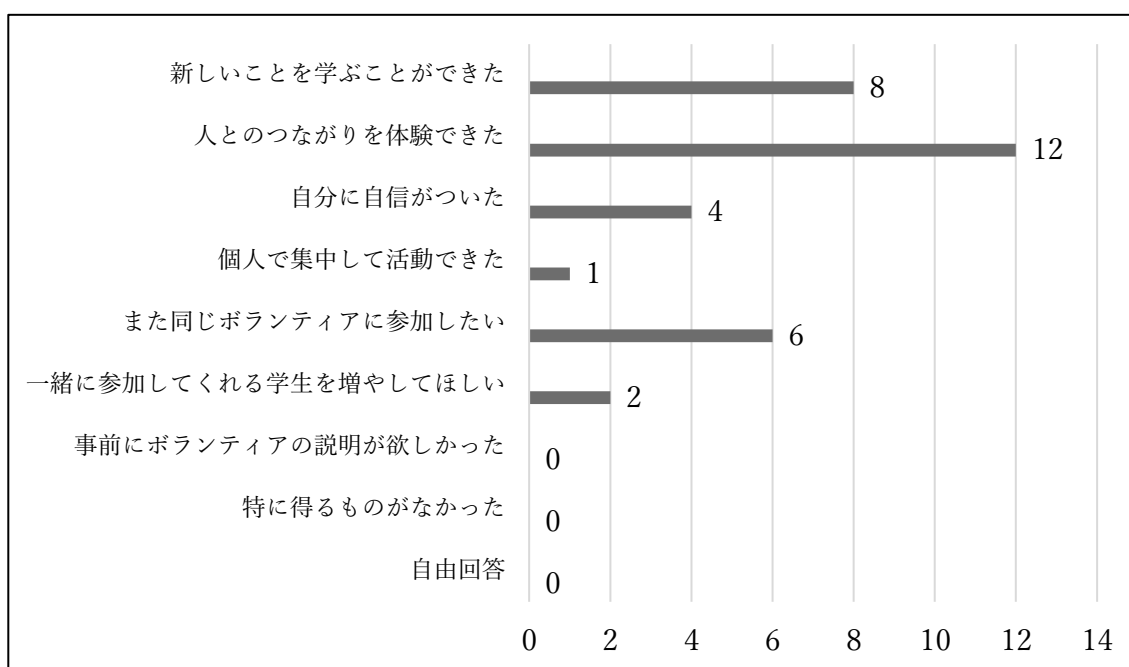
例年はメール配信が多数を占めていたが、今年度はSNSが一番多い結果となり、掲示も効果的になっている結果となった。理由としては、新しく始めたLINEやInstagram等の情報発信が大きいのではないかと考える。特にLINEは学生の多くが利用し、1日に何回か情報を確認するため、より情報が届きやすいと考える。課題としては、昨年や先ほどの課題と同様だがTwitter、Instagramにおすすめのボランティアは必ず掲載するなど、より一層活用していくことが必要である。また、掲示板や知り合いから情報を得ることも多く

あり、特に掲示板は昨年の2倍という結果となっている。これは印刷物であった掲示から、手書きに変えたことへの結果が出ているのではないかと考える。手書きのものに変えたことにより、掲示に対して目にとめやすく、興味を持ちやすくなったからではないかと考える。

⑧ 参加したボランティアはどうでしたか。※複数回答

結果は「人とのつながりを体験できた」という回答が最も多かった。理由として、ボランティアでは子どもや、ご高齢の方まで幅広い世代の方と交流することができるため、ボランティアを通して「人とのつながりが体験できた」と答える学生が多いのではないかと考える。また、ボランティアならではの学びも多く、「また同じボランティアに参加したい」という声も多いことから、ボランティアに参加して楽しかったと認めていただけたことはとても喜ばしいことである。そしてアンケートを実施するだけでなく、この回答も学生へのアピールに使わないといけない。

来年度もボランティアの募集をしていただけるように、コーディネート件数を増やし、一つ一つの繋がりを大切に、丁寧に対応することが求められている。



⑨ 今年度、ボランティアルームを通さずにボランティアに参加したことはありますか。

A: はい	4人
B: いいえ	9人
C: 興味がある	5人

「いいえ」という回答が一番多い結果となった。この結果はボランティアルームが、ボ

ランティアに参加する際に重要な情報源であると共に、ボランティアに参加するきっかけとしての役割があると考え。これからも情報発信とボランティアルームならではのコーディネートを行えるよう努めたい。

⑩ 毎月ルームスタッフが参加する月別ボランティアに参加したことがありますか。

A:参加した	4人
B:参加していない	8人
C:そのような活動があるとは知らなかった	6人

「参加していない」が一番多く、次いで「そのような活動があるとは知らなかった」が多い結果となった。昨年度は、38名中15人が「そのような活動があるとは知らなかった」と答え、今年度と比べると、認知度は上がったように見えるが、まだまだ参加のしづらさや、認知度が低いようにみえる。対策として、SNSや掲示板、呼び込みなどを積極的に行うなどの工夫が必要である。

⑪ ボランティアルームの季刊誌を知っていますか。

A:知っている	7人
B:知らない	11人

今回初めて行った質問だが「知らない」が多い結果となった。理由としては、配布場所がボランティアルーム前掲示板と、6号館掲示板前との二カ所に限られていることや、直接配布していないことが考えられる。全学年のガイダンスや、ボランティアに参加した学生、呼び込み等で学生に直接配布するなど工夫が必要である。

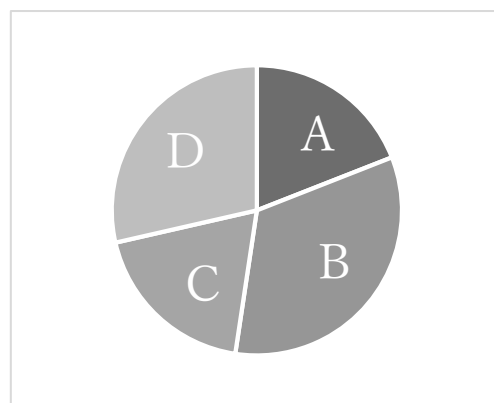
⑫ 食堂前などでボランティアルームのスタッフがボランティアの呼び込みをしていることを知っていますか。

A:知っている	8人
B:知らない	10人

「知らない」と答える学生が多い結果となった。理由としては、食堂や6号館を使わない学生が多いからではないかと考える。6号館は、教育学科や現代日本社会学部の学生の学生が多く、告知しやすい場所ではあるが、今回のアンケートでは文学部の学生の回答が多く、その場合は認知度が低くなることが分かった。また、月別ボランティア等の呼び込みも食堂や6号館で行うため、文学部の学生には認知度が低い傾向にあるのであれば、文学部の学生が通る2号館での呼び込みなど工夫が必要だと考える。

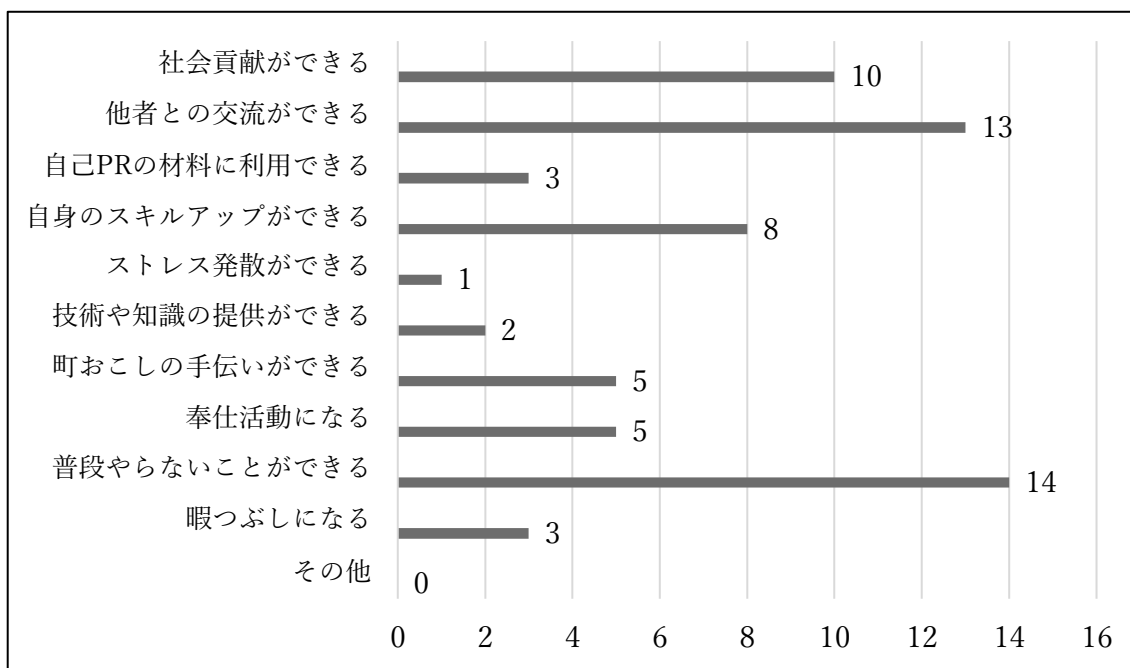
⑬ 今後あなたが参加してみたいと思うボランティアはどれですか。※複数回答

A:子ども	8人
B:地域	14人
C:福祉	9人
D:災害	12人



昨年度は「子ども」が一番多かったが、今年度は「地域」が多い結果となった。その理由として、地域を学ぶ現代日本社会学部の学生や、地域のイベントのボランティアが数多くあり、地元でボランティアをしたい学生も多いためではないかと推測した。次いで災害のボランティアが多いことについては、今年度は台風被害が多くあり、ボランティア募集を行ったことから、何か自分も力になりたいと思う学生が多くいたからではないかと考える。

⑭ あなたはボランティアをどのように考えていますか。※複数回答



「普段やらないことができる」、「他者との交流ができる」と答えた学生が多い結果となった。問8にて、「参加したボランティアはどうでしたか。」と聞いた際「新しいことを学ぶことができた」、「人とのつながりを体験できた」と答えたことが反映しているのではないかと考え

る。また、ボランティアについてプラスに感じていることも多く、ボランティアを通して学べること、自分が成長できたと思うことを伝えていけるようにこれからもコーディネートをしていきたい。

⑮ ボランティアルームスタッフの対応はどうか。

- とても丁寧で行きやすかったです。
- 優しく接して下さる。
- 各ボランティア活動について、丁寧に説明してもらえるのでとても助かっています。
- いつも雰囲気明るくて様々なボランティアに詳しい印象がある。
- 神対応 いい人多すぎる。
- 丁寧だと思います。
- とても丁寧な対応をしてくれた。

スタッフの対応に高評価があり、これは対応力の均等化や、スタッフ一人一人の丁寧なコーディネートの成果であると考え。だが、先輩方の対応が大きいことも考え、今年度もスタッフの教育を行い、来年度も良い評価をしてもらえるようお仕事講座等を持続的にを行い、丁寧な対応を続けていくよう努めることが大切である。

⑯ ボランティアルームに対する意見や要望、改善点があればお願いします。

- 特にありません。
- これからもどんどんボランティア情報をお願いします！
- 自己PRのために参加している人が多いように感じるのであまり参加したいと思えません。食堂前での募金活動も支援しづらいです。

これからもボランティア情報を発信していくと同時に、自己PR だけではない、ボランティアならではの学びや、人とのつながりを伝えていけるように活動していくことが大切である。

4. 反省・まとめ

反省点として昨年と比べ回答数が減少したことが挙げられる。より多くの人の回答を得るべく、1週間に1度アンケートへの記入をメールやSNS等をお願いしたが、送信した日しか回答が得られない日も多くあり、回答数が伸び悩んでしまった。原因としては、昨年より実施期間が一週間短いことや、より詳しく状況を把握するため質問を増やしたことではないかと考える。実施期間について来年度は早くから準備し、班での話し合いを増やし、聞き出したいことを簡潔に質問することで改善したいと思う。

また「季刊誌で何が知りたいか」という項目を入れずにアンケートを実施した。季刊誌の知名度をアンケートに入れてほしいとの要望は共有されていたが、上記は共有されてお

らず、質問に加えていなかった。来年度は、季刊誌班とも話し合いの場を設け、情報を共有してアンケートを実施していきたい。

良かった点として、スタッフの対応には高評価があげられる。これはスタッフの対応力を均一化するという昨年度の反省を、今年度のお仕事講座や、仕事の仕方を分かりやすく解説するなど、スタッフの教育を行い、スタッフの一人一人が丁寧にコーディネートを行ってきたからだと考える。

来年度も、お仕事講座等を行いスタッフ全員がボランティアについて把握し、きちんと情報を伝えられるようにすることが大切である。まとめとして、アンケートで得た課題を確認し、来年度には改善できるよう行動したい。

【文責:文学部国史学科2年 下野 実紀】

4. 資 料

令和元年度 年間スケジュール

日時	場所	活動内容
4月24日(水)	512教室	第1回全体ミーティング
5月8日(水) 10日(金) 13日(月) 14日(火) 16日(木)	ボランティアルーム	HELLO ボランティア
5月23日(木)	511教室	第2回全体ミーティング
6月16日(土)	介護付き有料老人ホームくらたやま	くらたやま音楽祭
7月18日(木)	511教室	第3回全体ミーティング
8月6日(火)	722教室	ちょこっと福祉体験
8月9日(金) 22日(木)	松阪市社会福祉協議会	サマースクール
8月29日(木)	721教室	第4回全体ミーティング
9月10日(月)	愛知淑徳大学星が丘キャンパス	他大学視察
9月19日(木)	511教室	第5回全体ミーティング
9月21日(土)	伊勢市立東大淀小学校	東大淀地区まちづくり協議会5周年企画
10月1日(火) 3日(木) 4日(金)	食堂前 6号館前	令和元年台風災害義援金募金
10月24日(木)	511教室	第6回全体ミーティング
10月26日(土) 27日(日)	皇學館大学記念講堂脇道路 712教室	倉陵祭
11月10日(日)	介護付き有料老人ホームくらたやま	老人ホームでLet's文化祭
11月21日(木)	511教室	第7回全体ミーティング
11月24日(日)	伊勢市ハートプラザみその	伊勢市ボランティアフェスティバル
12月7日(土)	皇學館大学付近	倉田山お掃除企画
12月19日(木)	511教室	第8回全体ミーティング
1月23日(木)	511教室	第9回全体ミーティング
2月6日(木)	721教室	令和元年度年間報告会
2月21日(金)	511教室	第10回全体ミーティング
3月17日(火)	511教室	第11回全体ミーティング

令和元年度 ボランティア募集一覧

随時ボランティア

No.	日時	ボランティア名	場所	住所	内容
No.1	平日 9:00～14:00	メンタルフレンドin伊勢	伊勢市教育支援センター	伊勢市	児童生徒の自立のための支援活動
No.2	毎月数回程度 9:30～13:00 (体験活動日は15:00まで)	ふれあいフレンドin四日市	四日市市教育会教育支援課 適応指導教室(ふれあい教室)	四日市市	ふれあい教室にて児童生徒たちの支援活動 生徒宅訪問(話し相手、遊び相手)
No.3	毎日 9:00～12:00(2時間程度)	伊勢赤十字病院 ボランティア	伊勢赤十字病院	伊勢市	車いす貸し出しの補助、リハビリの送迎、裁縫、 ヨガ教室、マジックショーなど
No.4	月～金 9:00～11:30 13:00～15:30	遊びの広場「だっこ」	鳥羽市立あおぞら保育所2階 (鳥羽市子育て支援センター)	鳥羽市	子育て支援センターや出張広場サークルなどの場で 子どもと一緒に遊んだり、見守りをする。
No.5	月曜～金曜 15:00～18:00 長期休み 9:00～18:00	松阪学童保育ボランティア	第二青木ビル1階	松阪市	集団遊びの見守り、宿題サポート、 授業(算数・国語・英会話)サポート、イベント等のサポート
No.6	学校のある月・金限定 毎朝8:00～8:20頃 学校稼業日に運行	渡会特別支援学校 スクールサポーター	いせトピア バス停	伊勢市	スクールバス乗りこみ時の補助
No.7	平日 15:30～17:00	玉城町つつじが丘児童クラブ	玉城町立下外城田小学校	度会郡	学校帰りの子ども達と遊ぶボランティア
No.8					
No.9	H31年4月～R2年3月 (月2回/年24回) 基本として 第1・3土曜日/10:00～正午	Jr.ベースボール教室指導員 補助ボランティア	4月～11月・・・ 志摩市浜島ふるさと公園 多目的グラウンド 12月～3月と雨天時・・・ 志摩市浜島B&G海洋センターアリ	志摩市	幼児(5歳)～小学2年生の子どもを対象に野球の ルール・マナー・投げる・打つ・捕る等の基礎の指導
No.10	毎週火・金 19:30～21:30	バレーボールスクール	金:倉田山中学校 火:五十鈴川中学校	伊勢市	バレーボールのサポート
No.11	5月1日(水)以降 ①10:00～12:00 ②16:00～18:00	児童発達支援・ 放課後等デイサービス	TEAM創心	松阪市	重症心身障がい児の見守りや補助、発達・自立を 促すための機会づくりの体験
No.12	H31年4月～R2年3月平日の 9:30～14:30で2～3時間	メンタルフレンドin津	ほほえみ教室 ふれあい教室	津市	津市在住の不登校または不登校傾向にある 児童生徒に対する支援や相談
No.13	毎週木曜日17:00～20:00	子どもの学習支援プラス	伊勢市福祉健康センター3階	伊勢市	伊勢市内の小・中学生の就学援助
No.14	平日の放課後及び夜間 夏休み冬休みなどの 長期休暇中土曜の午前中	地域子ども教室	笹川・三重平・中部・大池の各地区の 学校や公共施設 (笹川東小・笹川西小・西笹川中、 神前小・三重西小・三重平中・中		国語・算数・英語などの学習支援、休憩時の 子ども達とのコミュニケーション
No.15	平日10:00～16:00	れんげの里ボランティア	障害者支援施設れんげの里	度会郡	利用者さんとオセロやカラオケに行ったり、 れんげの里のイベントの準備・参加
No.16	7月22日(月)～8月30日(金)	放課後児童クラブ支援補助	度会町地域交流センター内	度会郡	夏休みに児童クラブを利用する小学1年生～3年生までの 児童ゲームや運動、読書をしりして一緒に遊ぶ
No.17	月～金 9～15時 土曜日 日曜日 祝日9時～17時	日中一時支援ボランティア	ステップワン作業所	伊勢市	障害のある利用者の買い物や外出などの支援 利用者の生活の補助
No.18	①毎週火曜日(祝祭日除く) 12:30～15:00 ②毎週金曜日(祝祭日除く) 12:30～15:00	障害者スポーツ教室	①障害者センター グラウンド ②身障センター 体育館		中軽度の障がいをお持ちの方、重度の障がいをお 持ちの方とのコミュニケーション、 競技の補助、安全管理
No.19	毎月第4水曜日13時～20時頃	伊勢子どもオジーオーバー食堂	ゲストハウス愚狂庵	伊勢市	子どもやオーバーオーバー(高齢者)と一緒に夜ご飯を 食べながらコミュニケーションをとる。事前準備等

令和元年度 ボランティアスタッフ一覧

No.	所属	学年	名前
1	文学部国史学科	4	松下 翠里
2	文学部コミュニケーション学科		服部 悠馬
3			水谷 裕哉
4	教育学部教育学科		奥山 智司
5	現代日本社会学部現代日本社会学科		大田 芙有
6			奥 梨沙
7			杉木 真子
8			高田 玲志
9			中根 くるみ
10			村林 寛隆
11	文学部国史学科	3	渡辺 楓
12	現代日本社会学部現代日本社会学科		才戸 俊祐
13			中西 正樹
14			山川 廣太郎
15	文学部国史学科	2	下野 実紀
16			中西 涼
17	文学部コミュニケーション学科		中子 恵里花
18			西出 美郷
19			森田 麻友
20			吉田 綾奈
21	文学部神道学科		池田 千夏
22	教育学部教育学科		濱口 奈々花
23			樋口 葵
24			村嶋 大輝
25			山川 菜月
26	現代日本社会学部現代日本社会学科		岡崎 優香
27			中桐 優太
28			福島 勇気
29	文学部国文学科	1	濱口 英太
30			三苦 太誠
31	教育学部教育学科		奥田 陶子
32			川端 日南果

33	教育学部教育学科	1	黒田 結規
34			坂谷 海怜
35			清水 美玖
36			杉山 瑞姫
37			袖岡 美菜
38			松岡 克佳
39	現代日本社会学部現代日本社会学科		尾崎 友則
40			勝又 未結
41			須場 聖羅
42			土性 奈々香
43			増井 香苗
44			村上 葵
45			村林 凌樹
46			森井 洸樹
47			八尾 幸哉